

短編 5 篇

ヘルマン・ヘッセ 作

石橋 邦俊 訳

ノーマル国からのレポート ― 断片 ―

尊敬措くあたわざる親愛なる友よ、

貴兄のご好意に勇を得て、この不幸な数年の間中断されていた私たちの書簡のやりとりを（もつともそれは、対話というより常にむしろ私の一方的なモノローグのようなものでしたが）再開し、もう一度、私の生活とこの地の情況についてお知らせしたいと思えます。もちろん、私たち、そして私たちの国家とその仕組みに関し、あるいは貴兄の方が私以上に通じていらっしゃるのかも知れませんが、身勝手な見方や考え方にとらわれたままとは言え、私はここで確かに快適にくつろいで暮らしていますが、それでも私たちの共同体と、私たちの生活にあるいくつもの奇妙さ、矛盾、あるいは意外さに驚きや怖れを覚えたり、馬鹿にされたとか出し抜かれたとか、好きなようにしてやられたとかい

感情を抱くことがないわけではないのです。まあ、そうしたものなので、おそらくこの世はいつも、どこにあっても、今も昔もそうなのです。それに申し述べましたように、私はこの暮しを心地よく感じていますし、現状に批判を加える意図も必要も持っておりません。苦情を言うなどなおさらです。逆に、私たちのまことに広大な施設での生活は良好ですし、ノーマル国での暮しが私たちに投げかける様々な謎は、あなたがたの北部ブロック（ご自分の国を目下、あなたがたが何と呼んでおられるか知りませんが）のそれと、もしかしたら、余りに大きく異なっているわけではないでしょう。私たちを考えさせたり不安にしたりするのは、例えば、このような疑問です、「我々の管理者は一体誰であるのか？」ですが、この根本問題については取りあえず、まだ口をつぐませていて下さい。最後の専制政治体制の崩壊後、ここで公式に使われて

いる用語で言う「諸階級独裁」が私たちの国に成立した次第についても、知らされているのはごくわずかです。しかし、貴兄はむしろ別の疑問、と言うより様々な疑問の集合体について興味をお持ちでしょう。つまり、私たちの施設、いや、かくも広大でかくも高い人口密度を有する私たちの公的組織の歴史を語る伝説に関わる疑問です。ご存じのとおり、私たちノーマル国民は、ここに、同盟的独裁制を布く西と東の国家集合体の一部を成す、あの領邦複合体の、自治を行う自発的居住者として暮らしています。ですが、私たちの領邦と組織は、アクイターニエンの北部の、一マイル四方にも満たない小さな公園風の土地から生まれたのでした。それに、十数棟の建造物を備えたこの公園は、先の政治的軍事的大変動に先立つ時代には、きわめてうまく管理された中規模の癡狂院でした。公認された歴史家たちは、この施設が一個の国家であり領邦であるものへ成長した次第を次のように説明しています。

あの「壮麗なる時代」の始まり以降、病的不安心理、集団異常心理のために、広く世に知られていたその施設は大量の患者の流入に対応しなくてはなりませんでした。その結果、居住用住宅群から村が、村の複合体が、最後に複数の地方と都市の複合体、つまり、現在の私たちの領邦が成立しました。その際、患者を細か

く段階づける必要に応じて、重症者・準重症者用、中毒患者用、神経症患者用、単なる過敏症患者用等々の諸施設の体系ができ、重症者のためのいくつかの診療所が以前同様、医師たちの手で当時の精神医学のルール通りに運営される一方、診療所の周囲に、医者とも精神医学とも無縁の団地や居住共同体から成る小世界が形成され、そのむしろ快適な生活環境のために、静安を求める人々がヨーロッパ全土から大量にやって来たのでした。かくして、私たちが信じ、また、かの伝説が伝える所では、W・O・国家集合体の安定直後、諸階級の独裁を基礎に私たちの共同体、つまり理性と正常な精神状態を有する三千万にも及ぶ者たちのための機関の成立を見るに至ったのです。理性と正常な精神状態を有する者は誰でも、幾つかの試験と義務の履行を前提として、機関へ入る権利を有しています。つまり、施設のもともとの用途とは反対に、国にまで拡大した私たちの機関には健全かつノーマルな人々が統合され、他方、その他の部分、東風、西風に吹き寄せられ集まった国家集合体のはるかに大きな部分には多少なりとも病的かつ異常をきたした人々が住まい、統治するようになったのです。伝説は以上のように伝えていきます。そして私たちは根本においてそれをよしとし、それを信じています（生あるものはそれぞれがおのれ

自身の存在を信じており、また信じないわけにはいかないのですから。ただ、比較的最近のことですが、人を当惑させる別の諸理論、諸思想と手を携えて、私たちのもとに次のような厄介な考えが忍び込んで来ましたが、「自分をノーマルな健全な人間であると思いたがる、もしくはそれを誇示したがるのは、狂人を識別する、はるか昔からの指標である。それは我々の国にあつても同様である。我々は決して理性と正常な精神の持ち主ではない。我々は精神病者である。それ故、一見、国と見えるここに我々が住んでいるのは自由意志に基づいているのではなく、我々の国も国家ではない。早い話、我々とは狂人で一杯の巨大な施設ではないのである」と。既に述べたように、これは私たちのいくたりかを、ほんの時折り比較的深刻にとらえる疑問に過ぎません。もつとも、こうした人たちは私たちの中で人並み以上に繊細にして、かつ、天分に恵まれた頭脳の持ち主に属していますし、狂っているのは我々か他の人々かという問題は我々が天才たちの哲学や思弁の主要内容を形成しています。私たち別の住人は、より冷静で年配の私たちは、無論、一般のルールをより尊重し、代々受け継がれて来た伝説、すなわち、我々の理性的な性格とノーマル国在住の自発性を誠実に単純に信じています。と言うより、私たちはこう考

えているのです、「こうした解きようのない疑問にいきり立つても何も生まれません。おかしいかノーマルか、猿の檻の猿なのか鉄格子越しにのぞき込む動物園同好会員なのか、その確定はさほど大切なのではない。現実の生活も形而上学もともに、なるほど問題の余地なしというのではないが、しかし全く意義あふれるチャームングな遊戯ととらえ、この遊戯の範囲内で我々が体験できる多くの良いもの、美しいものを楽しむ方が正常であり健康にも良い」ただし、我々が管理者氏的人格と役割に関してだけは、私もありとある疑念や、おそらくは出しゃばりな解釈の試みを禁じ得ません。ですが、この件については差し当たり何も述べません。言語と論理という粗雑な手段でこの微妙極まりない問題に敢えて近づけるところまで持つていくには、まず整頓し説明せねばならぬことがまだ、きわめて多いのです。敬愛する後援者殿、私たちは手近な、自明と見えるものをよりどころとしましょう、そして、思いわずらうのは可能な限り、健康を損なわぬ範囲に止めるよう努めましょう。

幾度か転居した後には私は目下、再び、数年前と同じノーマル国の本来の中心地に住んでいます。つまり、かつての癡狂院の敷地内、あの有名な古い公園と広大な菜園を隔てている生け垣から遠くない、比較的新し

い別棟です。この居住地には、私たちの国家の他のどこにあつてもそうであるように、長所と短所や土地に独自の伝統、特権と地役権があります。相互に極めて異なる前史を持つ領邦が結合した、まだ比較的若い連邦国家にあつては、いかに大きな力を持つ憲法やイデオロギーでも、その土地に強く根づいて受け継がれている生活形態を抹消するのは不可能なものですから。例えば、私たちノーマル国旧市街地区住民には、国民に課される様々な義務に、それほど気を煩わす必要がありません。すなわち選挙権は有していても、投票の義務はありません。また、国民のもっとも重要な義務たる納税は、施設管理局が代行してくれます。私たちは何ら気を煩わす必要がないのです。預金がある間は、税額は私たちの請求書につけられ、貯えがなくなると国は、私たちを再び税源とするために、別の地区の国の企業体のひとつへ送るのです。無論、自発性と自己決定の原則は百パーセント保持されています。私に知らされている限りでは、私の貯えは、四半期毎に行われる算定と納税を何回か乗り切る程度には、当面、まだ足りています。ただし、あの真に深刻な危機的状況が再来する場合は別です。すなわち、全住民が団結して暴動を起こし、その全資産を持って各地の税務局へ押しかけ、脅迫や、時には暴力まで用い、受領を強要

するので。これは、公務に携わるものには極めて不都合な事態であつて、なぜなら私たちの憲法の定めによれば、国家が全資産の唯一の所有者となつた場合、徴収すべきものが最早ないわけですから、公務員はすべて解雇されるのです。しかし、このような諸機構に關しては、尊敬する友よ、おそらく貴兄の方が私より詳細に通じていらつしやるでしょう。なぜなら私は、ある限られた範囲の内部にあつて、かくも完成に近づいた今日の複合体国家制度の中にあつても個人主義者であり夢想家であり、無字にして特段の関心を有しない随伴者だったのでから。私たちの文通は随分長く中断されていたわけですが、ともかくもまず私に再び信頼を寄せてくださり、描写し物語るようお許し頂けるならば、貴兄にもっと面白いことをお伝えできましょう。つまりそれは、私の、そして私たちの国の生活の小さな出来事の幾つかなのですが、おそらくそれを貴兄はご存じないでしょうし、もしかしたら、目新しく、楽しんで頂けることも知れないと思います。とりわけ、既に少々述べましたように、私たちの様々な地区、管区、都市ごとの、いくつもの地域的特質や自律性の存在がそれです。この独自性は、部分的にはるか昔から存続しているものを含む歴史的な性格を持つ特性であり、自由意志にもとづく独裁的政体も

たらしめた共通性があつても、非常にしぶとく存続しています。例えば私の場合、かつて三、四年前、自由意志に基づく自発的転居の実施を複数の官庁機関より要請され、それまで色々興味深い話を読んでいたフラクセンフィンゲン市へ移つたことがあります。ある庭の四阿あずまやを借りて入居し、幾度が散歩もして、丁度、緑地の中の座り心地の良いベンチで小さな詩を書き留め始めた時でした。疾風のような速さで一人の警官がモーターバイクの轟音とともにやつて来て、何を行つていいのかと訊くのです。

「詩を書いていきます」、私は言いました、「お許し願えないのでしょうか？」

「ほほっ」、警官はたしなめるような口調で続けました、「私がそれを許可するのであるならば、まことに私は自分の職務にさほどぶさわしからぬ人間というわけでしょうな。詩を書いていらつしやる。そうですかね？ さてそれなら、あなたの資格・許可証明書はどこにありますか？ あなたの組合証はどこです？」

恐くなって私は正直に、それに類するものは所持してないと答えました。しかしそれでも勇氣を出してつけ加えました、知る限り、ノーマル国の憲法のどこにも組合所屬の強制と組合証明に関して述べられていない。

「なかなか度胸のある御方だ」、警官は不機嫌な大声を上げました。「ノーマル国などどうでもよろしい。我々がいるのはここ、フラクセンフィンゲンなのです。つまり、証明はお持ちでない？ となれば、それはつまり、もしやあなたが何の組合にも入つていらつしやるらないということですか？」

私は事実、そうでした。そこで私は教えられたのです、何かの組合に入らずに何らかの活動を行うこと以上、あつてはならない絶対的なタブーはこの町になんということを。私は紙と鉛筆を差し出し、厳格なこの警官について行かねばなりません。私は市役所で市長（ついでながら、まことに好感の持てる人物でした）に釈明しなければなりません。そして彼に、問題点は理解したので、詩人・文学者組合へ配属して欲しいと願ひ出たのです。今度は市長が少々、当惑する羽目になってしまいました。そのような組合は市になかったのです。組合への入会まで一切活動を行わないよう宣誓せよという要請を私が果たすと、評議会が招集され、込み入つた喧々囂々たる論議を経て評議会は決定を下しました。私に最も適していると思われるのは仕立屋組合であり、この組合への加入を懇請すべきであると。再び数日が過ぎ、ようやく仕立屋組合の理事たちが私を訪ねて来ました。規約に従えば、

組合は本来、私を受入れることはできないし、それを望んでもいないが、たまたま最年長会員が他界したところであるため、総会が許可し、私が組合規約の遵守を保証するのであれば、私のための席は空いていると言うのです。人間として、また詩人としての私の名譽と何ら齟齬が生じないのであればと一言はしましたが、無論私はすべてを約束しました。ここでまた会議が開かれ、私は顔合わせのために組合へ連れて行かれ、その後、試みに組合の荘厳式典、つまりあの最長老会員の葬儀に出席するよう招待を受けたのです。こうして私は、組合の旗（この旗はまだフラクセンフィンゲンの栄光の時代、公使館参事官リヒターの援助を得て、寄贈されたということです）に従って幾分暗い面持ちをして葬列をともにしたのです。式典が執り行われ、組合の花輪が献じられた後、私たちは宿屋「リンデ」に移って、なかなかの白ワイン（私たちはかなりたしなみました）付きの軽食を取りました。ここでは晴れやかな、打ち解けた、快活な雰囲気となったので私は、上級の組合員と思われる紳士のひとりを脇に連れだし、組合員として入会できる見通しがあるかどうか、訊ねてみました。

その人は好意的な口調で言いました、「ああ、断る理由はひとつもありません。あなたは好感の持てるお

方だ、それに、これまで詩人の組合員がいなかったというのも、根本において何の障害でもありません。正直に申し上げますが、私個人の考えですが、私はこれまでずっと、詩人とは全集を書き上げて、ずっと以前に物故した人のことだと思っておりましたよ。ともあれ、あなたはあなた御自身で、何か皆が気に入る、あなたの善良な心持ちも示すようなことをなさるのが、もちろん良いとは思いますが」

それは自分も心から望むところであると私は答え、組合の人たちに快く迎え入れられる最良の方法は何かと助言を乞いました。

紳士が言うには、「そうですね、今ここで大盤振る舞いをなさるには及びません。例えばグラスを鳴らして謹聴を乞い、立って皆におっしゃっては如何でしょう、神のうちに憩い給う我らが長老と組合への好意のしるしに、故人に捧げる詩を一篇作り、また、本日のワインの費用を引き受けたいと思うがと」

感謝をこめて私はこう言いました、「ワイン代のアイデアはまことに結構です。ですが、亡くなられた長老のための詩をどのように作れば良いでしょうか。あの方を私は存じあげませんし、面識もありません。知っているのはただ、あの方が仕立屋で、あなたがたの組合員たる名譽を持つていらつしゃったということ

「だけです」

私の恩人は言いました、「こちらへ見えてあなたはまだ日が浅い。でなければ、あなたは知っておられたでしょう、私たちの長老は仕立屋ではありませんでした。組合長も私も、他の組合員も同様です。あなたご自身も仕立屋ではないが、でも、組合員になろうと望んでいらつしやる」

「では、故人の御職業は何だったのですか？」

「詳しくは私も知りません。確か、以前はリキユール蒸留所の社長か所有者であつたと思います。教養があり、非の打ちどころのない作法をわきまえた人でした。ですが、ご自分の詩のことでまったく無用の心配をしていらつしやいますな。仕立屋を読み込む必要はありません。黄金の鍔を描いた、紅の絹の旗でも出せば十分でしょう。それとまあ、死について、また、人間の生と再会などといったことについて何か美しいこと。このような折り、皆が聞きたいのはそんなことです」

紳士はそわそわし始めました。私たちは出入り口に立っていたのです。そして中の小ホールではグラスの音が響いていました。これ以上引き止めておくには気が引けました。紳士には先に席へ戻ってもらい、しばらく間を置いて、全く目立たぬように後に続けました

が、軽食と良いワインのおかげで徐々に勇氣と上機嫌を取り戻し、立ち上がつて即興の詩を披露しました。書き留めておかなかつたのが些か残念です。私の他の詩を、力とリズムと親しみ易さにおいて遙かに凌駕していました。組合の紳士がたも全く無条件で気に入って下さいました。皆さんは本当に深く思いを潜め、感動と同感の心を重々しいうなずきに示しブラヴォーの声を挙げ、皆が皆、私とグラスを鳴らし、私に讃辞を述べ、私を彼らの組合の一員として歓迎する旨知らせようと立ち上がりました。私は涙が出るほど感動し、皆さん握手を交わした後で、なお、ワイン代を引き受けると宣言しようと思いましたが、この時、しこたま大酒を呑んだ後に全く稲妻のように閃くことのある、あの醒めた一瞬が、ここでも、私の貧弱な財布では確かに少々危なっかしいこのふるまいはもう全く不要であるという洞察を授けてくれました。そこで私は感激に圧倒され幸福な思いで口をつぐんだまま、乾杯のグラスを差し出してくれる多くの人たちに、黙って自分のグラスを捧げていました。皆は私を伝統ある、尊敬すべき彼らの組合へ礼を尽くして迎え入れてくれたのです。私は庇護されているのです。私の仕事が見張られたり禁じられたりすることは、もう決してないのです。十分に形式を踏まえ、定められたとおりにことは

運んだのでした。そして仕立屋組合について耳にすることは、その後二度とありませんでした。絹の美しい組合旗にしたがって行進したのは、この一度だけでした。仕立屋ではない人たちに混じって仕立屋ではない私が軽食とワインを共にしたのは、同輩たちの食卓に詩句を持ち出したのは、皆と親しく言葉を交わしたのは、この一度だけでした。何やら見覚えのあるように思えてならない顔を見て、あの時の組合メンバーではないかしらと考え込むのも、確かに稀にありましたが、顔の持ち主はそばを通り過ぎて消えてしまい、そんなわけで、あの日経験したすべての中で私の記憶にずっと残っているのは、故人を悼むお酒好きのサークルでのあの二時間の思い出以外に何もありませんでした。

あの折りに私が、あのような普通ならやらないかたちで持ち出し、大層な喝采を浴びた詩については、落ちついて考察してみると、こう言わざるを得ません、あれが書きとめられて残されなかったのは良かった、ひとつの幸運だったと。あの詩は私の身に合わない情況の産物でした。そうした情況を避けるために、予防するために、私は生涯、多くの犠牲をはらってきたのです。つまり、あれは、私には異質な、相応しくないものへの止むを得ざる適合から生まれたのでしたし、酩酊の状態から生まれたのでした。それも、素晴らし

い白ワインのせいというより（ワインについては、この上なく心地良い記憶が残っています）、むしろ、肩を組み合わせ心をひとつにした仲間気分、集団への帰属意識、共同体意識といった、いつもとは違った雰囲気のもたらした酩酊でした。政治家や人前に立つ牧師、講演会場の獅子たちには良い雰囲気かも知れませんが、詩人や同種の職業の人間には見合いません。こうした人間には、仲間うちではなく、静穏な孤独が有益なのです。随分美しく思えた、そして結構な喝采も博したあの詩を私は確かに忘れてしまっています。それだけでも詩が出来だった証拠です。しかし私は忘れたわけではありません、いや、幾許かの悔いと恥じらいとともに記憶に残しています、あの韻文の力ら説教を締めくくった内容を、曰く、死が我等すべてを待ち受けるとも、墓が我らを嘯み込む時、古き高貴な旗のもとで、ともに我等を思い、我等の追憶に酒杯を捧げる仲間たちがあると知ることはひとつの慰めである。こんな耳ざわりの良い言葉が、耳に媚びる御大層な文句が私のくちびるから流れ出たのです。テーブルを共にするまっとうな人たちをつつとりさせ、その胸を高鳴らせたのです。そして、この人たちの仲間であり、この人たちに護られているという私の感情が一種の気の

迷いであり、過ぎてみれば私は依然、それまでとまるで変わりなく孤独で醒めた、社交というものの持つ魔力に不信感を抱く人間のままであったように、他の組合員の熱狂も仲間扱いも親切も、おそらく、ただのシャボン玉、素敵な嘘でしかなかったでしょう。それに私は私で、「仕立屋」の組合への加入がいつまでも支障になる結果を何ら惹き起こさないことを、つまり、会合や親睦の機会や宴会が更に持たれることはなく、また何の拘束も義務も私に生じないことを、その後、重ね重ね得心していったのですが、彼らも、親愛なる同朋にして私同様仕立屋なる彼ら、感激と感謝と熱狂をもつて私の詩に耳を傾けてくれた彼ら、私と固い握手を交わした彼らも、その後、私のことは一切まるで全く気にとめなかったのです。組合と私の一部始終にあつて、間違いなくこれこそが粹な、素敵なところですよ。あの時、世間が、社会が、公の世界が脅迫的な要求を掲げて私にまた近づいて来たのでした。警官がモーターバイクの轟音とともに現れた後、あたかも世界が再びまた、私の職業を禁じようとしている、あるいは、大目に見てやる代わりにとて釣り合わない、法外な、耐え難い犠牲を私に払わせようとしているかに見えたのでした、するとその後、万事、なんだか儀式のような、冗談のようなものになつてしまつて、世の中が

私に要求したのは、部屋ひとつを埋めるくらいに邪気のない人たちとの二、三時間の酒宴であり、その人たちは翌日になれば私にもう知り合いのような顔もしなければ、私にもそれを求めなかったのです。

尊敬する友なる方、これがフラクセンフィンゲンでの私の体験です。その後間もなく訪れた西部文化管区では、全く異なっていました。再び、自由意志にもとづく自発的転居の実施を促されたので、私はそこへ引越したのです。この地区を選んだのは、文化的な事柄に関し特に関心や意欲が高いというこの管区の評判もありましたが、むしろ、畏怖と畏敬の念をこめて口にされる、あのノーマル国管理者がよくここに滞在されるといふ、実証はないながらも広く流布している噂のためでもありました。ともあれ、包み隠さず申せば、西部管区へ行つてみようという私の決心は、まず第一に日和見的考量の産物でした。私の経済状態には一種の再編成が必要だったので、フラクセンフィンゲンで、まとまった収入を得るほどの道を見出せなかつたばかりか、そこに借金まで作つてしまつていたのです。それ故、比較的短い滞在期間の後に私が自由意志にもとづく転居を提案されたのは、他の様々な理由よりも、おそらくはこのような経済上の不備によつていたのかも知れません。さて、西部文化管区では、私が見た情

報がすべて虚偽でなければ、芸術や学問が評価されていきましたし、盛んであるのです。そこでは学校や大学、芸術育成機関、博物館や図書館、出版社、雑誌社が高いレベルにあり、同じく、様々のコンテストや国からの委嘱事業、色々な芸術・芸術協会があるということでした。私の業績によつてあれ、文学の世界で私がかつて占めていた無視できぬ地位のおかげを借りてであれ、そこで足場を固め、かつてよく知られた私の名前が再び名声を取り戻すように持つて行ければ、経済上の成功もやつて来ないわけではないのです。それから更に、地位も安定した、尊敬される成功者として西部管区にとどまり、満ち足りた豊かな生活を樂しみ、多額の税金を納め、高い人望を享受するのが、あるいはまた、ここで得た財を携え、私が非常に心惹かれる、ノーマル国葬祥地たる公園地区へ戻り、そこに再び長く居住できる資格を、年金生活者として、終生暮して行ける資格をかうのかどうか、まだ差し当たり、多くは考えていませんでした。公園へ、私たちの国の原細胞へ戻るといふ誘ないが、その魔力から私を完全に解き放つことは決してありませんでした。ですから、文化管区の精神的な活動の繁栄にどれほど敬意を払っていても、片時も休まぬ文化的活動を共にする幸福が、それに付随する様々な努力に必ずしも見合っ

ているとは思いませんでした。このような「幸福」は、静安を好む老人より、意気盛んな若い人たちにより多くの意味を有しているのでしょう。しかし他方、この管区は、かの管理者様と彼の王国のこの地域を結びつけているという特別な関係についての、既に述べました例の噂ゆえに、私には強い魅力を有しております。この人、この偉大な知られざる人についてさらに何かを聞き知ることができるかも知れない、この人と、あるいはそれは叶わずとも、この人と仕事を共にしている上級幹部とつながりを持つるかも知れない、そして例えば、この人を取り巻いている数多くの秘密のあれがこれかでも解明することができるかも知れない……こんな思わくの方が私には、尊敬する恩人たる貴兄、貴兄も想像して頂けるように、大きな意味を持つていたのかも知れません。

西部文化地区への移送が行われるまで、自由意志にもとづく転出者用のフラクセンフィングンの集合収容施設では、ほんの数日しか待つ必要はありませんでした。バスは三十人ないし四十人を収容できるようでした。私たちは皆、知識人が芸術家でしたが、面立ちも態度も朗らかで感じの良い二人の若い人だけは、同道したジャーナリストの話では、理髪師階級に属しているということでした。この二人は私の同業者の大多数

より好ましく思えました。同業者で私が好感を持てたのは、およそ二人だけです。二人は灰白の長髪に灰白の長い髭をたくわえた老人で、もういなくなつた、今日ではごく稀にしか出会えない芸術家タイプでした。髪、髭、服装と並んで、こうしたタイプは一種、超俗の風、茫洋と邪気のない風格を特徴としており、恥ずかしながら告白しますが、私はこうした人物にいつも何かしら惹かれるものを覚えてきました。尤も、当のこの気高く超然とした美しい老人二人に若い理髪師たちは、二人がまるで流行はずれの髪型と服装をしているもので、嘲りと露骨な軽蔑を見せておりましたが。陽気なこの二人の若者には、立派な老人たちが、少なくともその外面の姿において己が使命を自覚して継承している芸術家の伝統についての知識がまさに欠けていたのです。ところで、この白髪の老人のひとりはこの同業者、詩人でした。私はそれを、あのおしゃべり好きのジャーナリストから聞いたのです。そして私は、給油・休憩所の横の食堂で食事が出されている間に、この人がどうも着手したばかりらしい作品を一瞥する幸運までも得たのです。つまり、食卓の私の隣がこの人で、小さなノートを開いていたのです。ノートはまだ新しく、何も書かれていませんでしたが、唯一、最初のページに丁寧な、魅力的な装飾風の字体で数行

が記されていました。私はそれを興味津々の目つきで盗み見たのです。こう書かれていました。

「不良少年

少し前のこと、伝え聞くところでは、モルヒオあたりに一羽のオウムが生まれたという。このオウムは、まだ学校へ通っている間にも、知恵と知力と徳と落ちつきにおいて、また、神と人の前に喜びである点で、その兄弟や仲間すべてを既に遥かに凌ぎ、その名声は、賢者アフマドや、あるいは、最高の敬意を表してのみ口にされるべき族長アブラハムのそれに似て、多くの町と土地に満ちはじめていた」

ひとつの古典的な伝統の持つ洗練、円熟、そして滑らかさが簡素にしてモニユメンタルなものを解するモダンな審美感と幸福な結びつきを見せる、この物語りのスタイルに私はただ感嘆するばかりでした。確かに、この銀の髭をたくわえた老人に私はたいへんな好意を抱いていましたが、これほどの技量があるとは、信じられぬくらいでした。ですから、老人と一層近づきになれば、私にとって喜びだったのですけれど、くやしかな、この人の鋭敏な芸術家としての感覚は、生

まれ始めたばかりの自分の作品がひとりの好奇心の強い男、もしかすると芸術など解さぬ俗物かも知れぬ男、いや、それどころか、ねたみ屋の同業者かも知れぬ男に盗み見られているとまちがいなく感づいたのです。不意にその人はノートを憤然と閉じると、罰するよう天才のまなざしに言いようもないほどの侮蔑をこめて私を見据えたものですから、私は恥し入り悲しくなつて引き下がり、会食が終わりとなるより早く、テーブルを離れたのです。

(手紙はここで途切れている)

もの乞い

数十年前、「もの乞いの話」の想を練っていた時、それは私にとって、ひとつのお話だった。そして、そのお話をいつか私が物語るといふのは、不可能ではなさそうだったし、また、特に難しいようにも思えなかつた。しかし、「物語る」といふのはひとつの技能であり、その前提が今日の我々には(あるいは、そうは言わぬまでも、私には)欠如しており、それゆえ、「物語る」行為は既成のいくつかの形式の模倣たらざるを得ないということが、この間、時とともに明瞭になつてきたのだった。確かに、現代の文学はすべて、作家

がそれを真剣に受けとめ本当に責任を持っている限り、一層困難に、疑わしく、だがしかし大胆になつたのである。文学に携わる我々の中に、今日、己れの人間性や世界像、己れの言語、自分なりの信仰や責任、自分なりの良心や問題性が他の人たちにとって、つまり、読者に、また同業者にすらも、どの程度身近なものなのか、共有できるものなのか、わかる、理解できるものなのか知っている者はいない。我々が話しかける人たちは我々にはほとんど未知であり、その人たちについてわかつているのは、その人たちにとって我々の言葉や文字はもう既に外国語のようなものだということ、熟読玩味されているかも知れないが、多分に大まかにしか理解されないということ、他方、ある政治上の方向を持つ新聞や映画やスポーツニュースの構造や概念の世界の方が、この人たちにははるかに自明であり確実であり、間違いなくなじみ易いということである。

それ故、本来は私の子供時代のある小さな思い出の記でしかなかったはずのこの書きものを私が書くのは、息子や孫たちのためではない(彼らにはどう扱って良いかわからないだろう)、また何らかの別の読者のためでもない。あるいは私自身とおよそ同じ子供時代と子供の世界を持っていた僅かな人たちであれば、語り伝えることができないうこの物語(私の個人的な体験な

のである)の核はともかくとして、しかしそれでも、少なくとも思い出の映像や背景は、場面の道具立てや衣装は、見つけ出してくれるだろう。

いやいや、この人たちに向けて書くのでもない。それに、幾分なりとも予備知識があり、前提条件を満たしたこの人たちがいるからといって、私の書きものが物語にまで高められるわけでもない。道具立てや衣装が調えば、「お話」が出来上がるというのでは、まるでないのだから。それ故、私が白紙のページを文字で埋めて書いて行くのは、その書きものに私と同じような意味を感じてくれるかも知れない誰かに何かを伝えようという意図や希望のためではない。説明できぬまでもよく知られた、一人きりの作業、一人きりの遊戯を求める衝動ゆえである。芸術家は、今日一般に言われたり、心理学や医学が定義したりしている、いわゆる本能にまさに逆らいながらも、この衝動には、ひとつの本能であるかのように服従するのである。我々は確かに人類の歩みのある地点に置かれている。ある過程、あるいはある転換点といつても良い。この地点にあるという証拠のひとつが、我々が「人間」に関し、最早、何も知らないということである。余りに多く「人間」に関りすぎたのだ。「人間」についての資料が大量に過ぎるのだ。つまり、およそヒトの学というも

の、人間についての学というものは単純化への一種の勇気を前提としているが、この勇気を我々は持ち得ないのである。今日の最も成功した、最も現代的な神学体系にあつて、神について何ごとかを知ることができないという完全な不可能こそが最も強調されているのと同じように、我々の人間の学も、人間の本質について何かを知る、何かを言う欲求を小心翼翼と控えている。ならば、現代的な姿勢の神学者も心理学者も我ら文士と全く変わらない。一切の根拠の欠如。すべてが疑わしく疑問となつた。すべてが相対化され掘り返された。しかしそれでも仕事と遊戯を求めるあの衝動は、断ち切られずに存在している。そして我ら芸術家同様、学問の徒たる人々も懸命に努力を重ねているのだ、自らの観測器機と言葉を磨き、無から、もしくは混沌から、慎重に観測され記述された、少なくともいくつかの側面を取りだそうと。

さて、こうしたすべてを没落の兆候と見るも、危機ながらも必然の通過地点と見るも良からう。あの衝動は我々の内にあり続けているのであり、そして、その衝動に従い、我々の一人きりの遊戯を、いかに疑わしかろうと、また、いかに困難な情況にあつても続けて行くことによつて、なるほど孤独で憂いにあふれていても、しかし、それでもある種の愉しみを、生きてい

るといふ感情を支えてくれるわずかな力を感じるのだから。我々は嘆くにあたらない。孤独な営みに倦み、共同体、秩序、明澄さ、位置づけへの憧憬に惹かれ、教会や宗教のような、またはその現代における代替物のような形を取った避難所に自分を預けている、あの一部の同僚たちを十二分に理解してはいるけれども、独行者にして頑迷な非改宗者たる我々にとつて我々の孤立は、単に負うべき呪いや罰に過ぎぬのではない。我々はそこにもかくも一種の生きる可能性を持っているのだ。そしてそれは芸術家にとつて、創造する可能性である。

私の場合、私の孤独は、たしかには完璧ではある。言葉を通して私に結びついている人々の領界から私に届く批判や是認、敵視や勝手な仲間意識の類は、あらかじめ側をかすめて行くばかりだ。ちょうど、死に近い病人の耳を、例えば回復や長寿を願う見舞いの友人たちの言葉がかすめ過ぎるのと同様である。しかし、この孤独、世の様々な秩序や共同体からの脱落、単純化された生活形態や生きる技術に適合を望まぬ、と云うか、適合不能なこの姿勢は、だからといって地獄や絶望であると言つにはほど遠い。私の孤独は狭隘でも空虚でもない。なるほどそれは、今日通用している生活形態のひとつを共にするのを赦してはくれないが、例

えば、過去の何百もの生活形態（もしかすると、未来のものも含んでいるのかも知れない）の共有を容易にしてくれる。そこには無限大の大きさを持つひとつの世界があるのだ。それに何よりも、この孤独は空虚ではない。映像に溢れている。内に取り込んできた大切な品々、私となつた過去、吸い込んだ自然のいわば宝物庫である。そして、仕事と遊戯の衝動が、なお今も私の中でいささかなりとも力を持ち続けているとすれば、それはこの映像のゆえである。こうした幾千の映像のひとつをしっかりと捉え、加工し、書き留め、他の幾多の思ひ出の記録に更に一葉を加える。それは年を重ねるにつれ、確かにつらく疲れる作業となつてきたが、魅力を減じたわけではない。とりわけ気持ちが悪かれるのは、何百万という後年の印象や経験に覆われながらも光と彩を保っている、私の人生の始まりのころに由来する、あの幾つもの映像を書き留め固定する試みだ。こうした幼い日々の映像を受けとめた頃、私はまだ衝動と反応と関連の束、つまり今日の世界像の描く人間ではなく、一個の人間であり、一人の息子、一人の兄弟、一人の神の子供だったのだから。

この小さな場面を成す時と舞台と人物を確認してみよう。すべてを正確に再現できるわけではない。例え

ば、その年や季節。居合わせた人の数も正確とはいえない。おそらくは春か夏のある午後だった。そのころ私は五つと七つの間、父は三十五から三十七才だった。子供をつれた父の散歩の折りだった。そこにいたのは父、姉アデーレ、私。妹のマルラがいたかも知れないが、今ではもう確かめられない。それに乳母車もあって、まさにその妹か、あるいはおそらくこちらの方だろうが、一番下の弟のハンスを乗せていたと思う（弟は話すのも歩くのもまだ十分にできなかった）。散歩の舞台は一八八〇年代パーゼルのシュパーレン地区外れの二、三の通り。この通りの間に私たちの家があった。シュパーレンリンク小路のシュツツェンハウス近くである。小路は、その三分の二をエルザス方面へ向かう鉄道路線が占めていたため、当時は後年ほど広くなかった。あたりは一種小市民的な、落ちついた朗らかな一区画だった。その頃のパーゼルの一番外れにあり、もう数百歩先に広がるシュツツェンマッテは、あの頃、涯のない大平原で、アルシュヴィールへ向かう道沿いに採石場と町近くの農場数軒があった。私たち子供は、折りにふれ、その暗く暖かな牛舎のひとつへ行けば、搾りたての牛乳を飲めたり、小籠に卵を詰めて家へ持ち帰ることもあった。そんな用事を任せられたのに、責任と誇りを感じたものだ。近所の人たちは

穏やかな市民だった。手仕事職人が数人いたが、ほとんどは町へ仕事に出かけ、それが済めば夕方は窓辺にゆったりと座ってパイプをくゆらしたり、玄關先の小さな庭で芝生や砂利をいじったりという人々だった。少々騒がしいのが鉄道だった。そして踏切番どもは怖れられていた。この男たちはアウ通りとアルシュヴィール通りの踏切の、ちっぽけな窓がある板張りの小屋にひそみ、線路と通りを隔てている溝（そこに入る権限があるのは当の番人たちだけだったのだ）に落ち込んだボールか帽子かおもちゃの矢を私たちが取りに行こうとすると、悪魔のように不意に飛び出してくるのだ。彼らが私たちには恐かった。そして、一方の肩越しのバンドリアに下げた真鍮の、これだけは魅力的だった小さなホルン（音がひとつしか出ないのに、これで番人たちはその時々自分の苛立ちや退屈を表わすことができた）以外、何ひとつ私に好感を抱かせるものもなかった。もっとも、それでも一度、私にとつて初めての権力、国家、法、警察力の代表だったこの番人の一人が、驚いたことに私にひどく親身で親切だったことがある。日当たりの良い通りで独楽をひもで回しながら遊びに熱中していた私を手招きしたその男は、私に硬貨をひとつ握らせ、近所の店でリンブルク・チーズを買ってきて欲しいと優しく頼んだのだ。私は喜ん

で言うことをきいた。店で紙に包んだチーズ（ただし、その粘り気と臭いが私にはたまらなく怪しげに思えたが）を受け取り、その包みとおつりを持って戻った。踏切番は小屋の中で私を待っていたが、それが私には大変な満足だった。小屋の中をずっと見たくてたまらなかつたのに、今、入ることを許されたのだ。だが、そこには、この時は壁の釘に下がっていた金のきれいなホルンと、新聞から切り抜いた制服姿の髭の男の絵が壁板にとめてある以外、見るほどのものは何もなかつた。法と国家権力のもとへの私の訪問は、残念ながら最後は幻滅と当惑の混じった思いに終ってしまった。それは、ことのほか辛い感情だったに違いない。私はそれを忘れられなかつたのだから。この日、とても上機嫌で親切だった踏切番は、チーズとおつりを受けとつてから、私を帰す前に、感謝とこぼつびを与えようと思つたのだ。彼は椅子代わりにもなる小型の長持ちからパンを一塊取り出し、一切れ切り、チーズも、こちらにはけつこうな量を切り分け、それをパンにのせたと言うべきか塗つたと言うべきか、それを私の前に差し出して、遠慮せずに食べたと勧めたのである。私は、パンを持ってそつと出て行きたかつた。そして、親切な施し人の眼を逃れたら、すぐに捨てようと思つていた。しかし男はどうも私の意図に勘づいたらしかつた。

と言うより、どうしても自分のおやつのお相伴が欲しかつたのだろう。眼を大きく脅すように（としか私には思えなかつた）開いて、何故すぐにそこで食べないのかと譲らなかつた。行儀良く「ありがとう」を言つて、安全なところに逃げ込みたい気持ちになつていた。私には十分によく、痛いほどよくわかつたのだ。自分の贈りものに対する私の拒絶、いや、自分が大好きな食べ物への私の嫌悪を彼は侮辱と感じるだろうと。そして実際、そうだった。いたたまれぬ思いで、何か不用意な言葉を口ごもり、パンを長持ちの端に置き、向きを変え、三、四歩、もうとても目を向ける勇氣のない男から離れ、できる限りに速く走つて家へ逃げたのだつた。

権力の代理人である踏切番たちとの遭遇は私たちの近隣、私が生きていたような小さな晴れやかな世界にあつて、唯一、なじめないもの、様々の暗部や深淵や危険をのぞかせる唯一の裂け目であり窓だった。そのようなものが世の中にあるのを、私は当時既に、もう知らないわけではなかつたのだ。例えば、ずっと町なかのある酒場を出てがなりたてて行く、酔つた酒飲みたちの声を一度聞いたことがあつたし、また、ジャケツトの破れた男が二人の警官にひつたてられて行くのを一度見ていた。また別の時には、夕方、シュパーレン

の町よりの方で、男たちの殴り合いらしい、恐ろしいほどはつきりとした、しかし、同じように恐ろしいほど謎めいた騒動を聞いて恐くなり、ついて来ていた女中のアンナがしばらく私を抱きかかえて行かなくてはならないこともあった。それに加え、争う余地なく悪いと、厭わしく、完全に悪魔的と私に思えたものがあつた。ある工場を取り巻くひどい臭いである。年上の仲間と幾度もその側を通つたが、そのあたりの臭気にある独特の吐き気、息苦しさ、腹立ち、そして深い恐怖を覚え、それは踏切番や警官が私に惹き起こす感情と何か奇妙な風に似通つていた。暴力を忍ぶよりない、何もできないという重苦しい感覚になお、良心の疾しさまでが加わつたと言つたが、そんな疾しさが底にある感情だつた。と言つても、確かに私は実際に警官と関りあいになつて彼らの権威を身をもって感じたことなど、まだ一度もなかつたが、使用人や仲間の口から「待ちな、警察を呼んでくるから」という、いわくありげな脅かしをよく耳にしていたし、そうした時はいつも、問われているのは、踏切番とのいざこざの際と全く同じく、私の側の何か罪のようなものであつて、知つていることもあれば、ただ予感したり想像したりするだけのこともあつたが、そんな何らかの掟違反だつた。しかし、あのような無気味なものごと、あのように

な印象や音や臭いが私を捉えるのは、家から離れた場所、町の中の方だつた。そこは無論、最高に面白くはあつたが、ただでさえ騒々しく刺激的だつた。町外れの住宅地の通りに面して家の前に小さな庭を持ち、裏には洗濯物がひもに下がつてゐる私たちの静かな清楚な小世界に、この種の暗い印象は乏しかった。むしろ、親切で悪意のない、良く整つた人間性への信仰を促していた。この公務員や職人、年金暮らしの人たちに混じつて、父の同僚や母の友人たちもぼつぼつと住んでいたから、なおさらである。国を離れ伝道に携わつてゐる人たち、退職した宣教師、休暇中の宣教師、子供を伝導団の学校に通わせてゐる宣教師の未亡人、アフリカ、インド、中国から帰国した、敬虔な親切な人たちはかりだつた。私なりの世界区分の中で、この人たちは品位と格において決して父と同列に置くことはできなかつたが、父と同じような生活を送り、お互い、「兄弟よ、姉妹よ」と親しく名を呼び合つた人々だつた。

さて、これで私の物語の人物たちに話を移すことができる。主要人物三名、父、もの乞ひ、そして私、それに二、三名の副次的人物、つまり姉アデーレ、それにおそらくは妹と、私たちが押していた乳母車の幼い弟、ハンスである。弟については、以前、別の折りに

既にいくつか思い出を書き留めた。このパーゼルでの散歩の際に、彼は何かの役を演じたので、私たちと何かを経験したのではない。まだ言葉も出ない、小さな、私たちにひどく愛された、乳母車の中の宝物だった。ハンスの車を押すのを私たちは皆、特別な楽しみ、特別な榮譽のように思っていた。父も例外ではなかった。妹のマルラも、彼女がああ午後、私たちの散歩に参加していたとしての話だが、必ずしも登場人物として考慮するにあたらない。彼女もまだ小さすぎた。あの時一緒にいたというのは可能性に過ぎないけれども、ともかく妹には言及せざるを得ない。私たちのまわりでは随分少なかったアデーレという名前以上に耳慣れない、妹の変わった名前、マルラも、私たち家族の雰囲気と色合いを幾らか伝えてくれるのである。マルラとは、ロシア語に由来する、「マリア」の愛称なのであり、ここには他の多くの特徴とともに、私たち家族とその民族混合の異国性、一回性の本質が表われているのである。母や祖父母と同じく、父は確かにインドにいた。その地、インドの言葉を少々習得し、伝道団の仕事にあつて健康を損なつた。しかし、これは私たちの世界ではさほど特別でも珍しくもなかった。私たちが仮に船乗りの一家だとして、どこかの港町にいるのと同様だ。赤道付近のインドで、生活習慣の異なる

褐色の肌の民族に囲まれ、はるか国を離れた椰子の岸辺にあれば、他の皆も、伝道団の「兄弟」であり、「姉妹」だった。この人たちも幾つかの外国語で「主の祈り」を唱えることができたし、長い船の旅と、たいへんな苦労はあるけれども私たち子供には最高に羨ましい、ロバや牛車の長い陸の旅をしていた。そして、この人たちが私たちに伝道団本部一階の伝道博物館を案内してくれる時には、博物館の素晴らしい収蔵品について詳しく、しばしば冒険的なお話しや説明をしてくれるのだった。

だが、インドであれ中国であれ、カメルーンであれベンガルであれ、他の宣教師や奥さんたちは、なるほど広く旅をしていたが、つまるところ、やはりほとんど皆シユヴァーベンかスイスの出身だった。時に何かの拍子でバイエルンやオーストリアの人がその中に交じり込んでいると、それだけで人目を惹いた。しかし、自分の下の娘をマルラと名づけた父は、もつと異なつた、もつと人の知らない遠い国の出身だった。ロシアの生まれであり、バルト海沿岸の人、つまりドイツ系ロシア人だった。そして、世を去るまで自分の周囲、自分の妻や子供も話している方言を一言も受け入れず、シユヴァーベン方言やスイス・ドイツ語で話している私たちに向かつて、自分の純粋な、良く訓練された美

しい標準ドイツ語を使つたのだつた。この標準ドイツ語のせいで、この地で生い育つたかなりの人たちが私たち一家によそよそしく堅苦しい思いを抱いていたもの、私たちはそれを大変、愛し、誇りとしていた。父の壊れそうなほどに華奢な瘦せた姿、高く秀でた額、そしてしばしば苦しげではあつたが、常に開かれ、嘘がなく、否応なく良い作法と騎士的な態度を求め、人の心のより良いところへ訴えて来る純粋な眼差しと同じように、私たちは父のドイツ語を愛していた。わずかな親友しか知らなかつたが（そして私たち子供は、随分幼い時に知つたのだが）、そこにいたのは、どこにでもいる人間ではなかつた。ひとりの異邦人、異質の地帯から私たちのもとへ飛び来たり、その壊れ易さ、その苦惱、そして同じくらいに黙された郷愁のために際立ち孤立した、稀少な、高貴な蝶、あるいは鳥だつた。母に寄せる私たちの愛情は親密さと温もりと連帯感にもとづく、一種自然な好意だつたが、父へのそれには、畏怖とためらいとある種の賛嘆の念がほのかに含まれていた。そのような賛嘆の思いを子供たちに抱かせるのは、生まれながらに自分が持つなじみのものではない、異質のもののみである。

眞実を求めるといつても、まだがっかりするくらい

に微々たる程度であり、まだ思い込みから抜け出せないのだけれど、それでもこの追求は、形式と美しさを作るうとする努力と同じように、この種の書き物に欠けてはならない（さもなれば、こつした叙述は何らの価値も要求できないだろう）。確かに、私の眞実追求が私を眞実に近づけるわけではないかも知れないが、あるいは自分にはわからない何らかの形で、それでも全く無益というのではないだろう。例えば、この話を書き始めた時、マルクには何も触れない方が簡単だろうし、何の不都合もあるまいと思つてきた（この話に妹が関わっているかどうか、この上なく疑わしかつたのだから）。しかし、蓋を開けてみれば、彼女は確かに不可欠だつた、その名前だけでも。ある作品において、自分に大切なあれやこれといった目標に誠実に辛抱強く心を砕きながら、当の目標ではなく、全く（あるいはほとんど）自覚されず、重要とも思われなかつた別の目標や効果に辿り着いてしまつた作家や芸術家は、これまでも少なくない。例えば、アーダルベルト・シュティフターが『晩夏』にあつて何にも増して眞剣に、神聖に受けとめ、その実現にこの上なく辛抱強く誠実に努めた、他ならぬそのものが、今日の私たちにとつてこの作品の退屈な点であるという一事を考へても良いだろう。そして、そうであるにしても、あの別

のもの、退屈と同時に、そして退屈であるにもかかわらず存在し、退屈を遙かに超えて光を放つ、この作品の素晴らしいあの価値は、この努力、この誠実と我慢、書き手にとってかくも重要であるものを得るための苦闘なしには生まれなかつたろう。だから私も、どうにか可能な限りの真実を捉えようと腐心せずにはられないのだ。一緒に散歩をしたあの日、実際にそうであったように父をもう一度見ようとせずにはいられないのは、何よりそのためなのだ。というのも、父の人格全体を見渡すなど、子供の私の眼には、当然、到底無理だったし、今日でもほとんど不可能であるから、あの日、子供の私の眼に映つたままの父をもう一度見るよう試みるよりないのである。私の目に映つた父は、ほとんど完全な模倣できぬものだった、魂の純粹と品位が姿をとつたもの、闘士であり騎士であり受苦の人だった。その卓越を、父の異邦人の寄る辺なさと身体的な繊細さが和らげ、おかげで、父にこの上なく温かな愛情と好意を向けることができた。父に対して何の疑いも何の批判も私は知らなかつた、当時はまだ知らなかつた。父との衝突は残念ながら何ら未知というのではなかつたけれども、しかし、この衝突の際に、目の前の父は騎士であり警告者であり罰し赦す者であつて、私は追い詰められ恥じ入るしかなかったが、正しいのは

常に父だった。非難や罰を私は、常に自分で気付き、証明し、認めていた。父とその正義と徳に対する対立や反抗はまだ少しもなかつた。そうしたものはずっと後の衝突が起きてから生まれたのだ。どれほど私たちより優れていても、父以外の人に対して、この一種自然な、愛情によつて棘を奪われた従属関係を私は二度と持ちはしなかつた。というより、例えばゲツピンゲンでお世話になつた先生の時のように、同様の関係を見出しても長続きはせず、また、後年、振り返つてみれば、それが一種の反復であり、あの父・子関係への、いわば回帰願望だとはつきりとわかるのだった。

当時私が父について知つていたことは、ほとんど父自身の話から得たものだった。特段、何の芸術家的な性格も持たず、想像力も感情も母ほどに豊かではなかつた父が、インドや自分の故郷のこと、つまり彼の人生の輝かしい得意の時代の話となると、この時だけはある種の芸術的な才能を發揮し、楽しげだった。話題は何よりエストニアでの子供時代だった。生家と地所での暮し、幌付き馬車での旅行、海辺への遠出、こうしたことes父は語つて倦むことがなかつた。キリスト教精神に満ちていながらとても快活な、そして飛びぬけて朗らかな世界が私たちの前に広がつた。そんな天国のような、それほど多彩な愉快な生活がある、この工

ストニアヤリーフラントを何としてでも見たい、私たちがこれ以上にあこがれたものはなかった。パーゼルもシユパーレン地区も、伝道団本部や私たちの住むミユラー小路、ご近所も友だちも本当に好きだったが、ここで誰が遠く離れた地所に招待してくれようか？ 山盛りの焼き菓子や籠いっぱい果物でもてなしてくれよう？ 仔馬の背に乗せてくれよう？ 遠くまで幌付き馬車の旅ができれば？ 父は、あのバルト海あたりの暮しと習慣をいくらか、うまくここに持ち込んでいた。家族の中にマルラのような言葉があつたし、サモワールやアレクサンドル皇帝の肖像もあつた。それに、故郷の遊びを父は私たちにいくつか教えていた。ことに復活祭の卵ころがしには、こうした家の習わしを自慢するために、近所の子供をひとりくらい連れて来てもよかつた。しかし、この異国で父が自分の幼年時代の故郷と同じようにできたものはほとんどなくなつた。サモワールも結局は、実際に使うというより、むしろ博物館の展示品のようになつてしまつた。そしてそれだけに、ロシアの生家やヴァイセンシユタイン、レヴアル、ドルバト、故郷の庭、お祭りや旅行のお話は、遺憾ながら目の前にはないが愛しているものを父が自ら思い出すよすがとなつただけでなく、父はそうしながら私たち子供の中にも小さなエストニアを植え

つけ、父にとつて大切な映像を私たちの心深くに沈めて行つたのだつた。

父が抜群の遊びの名人、遊び仲間、遊びの教え手となつたのも、このこと、自分の故郷と幼年期に捧げた、この一種の礼拝につながつていられるのかも知れない。私ができる限り、こんなにたくさん遊びを知つており、それができる家はなかつた。その遊びから、こんなに多くの気の利いたバリエーションを考え出した家はなかつた、こんなに多くの新しい遊びを考案した家はなかつた。謹厳な義の人、敬神の人だつた父が、私たちのもとから消え去つて祭壇に祀られるだけの像のようにはならず、畏怖の対象そのものでありながらも、どこまでもひとりの人間であり、私たち子供の心の届く親しい人であり続けた秘密には、かなりの部分、色々な描写や物語と同じく、この遊びの天分があつていた。もちろん、父のこの遊戯好きについて今日、私が伝記的に、心理学的に解釈するに際し推測しているものは、子供の私にとつて何ら存在しなかつた。あつたのは、生き生きと働きかけていたのは、私たち子供にとつて、父のこの遊戯という形を取つた礼拝それ自体だつた。そしてそれは私たちの思い出に固有の座を占めているだけでなく、活字となつて記録されている。ここで舞台となつていられる時期のすぐ後に父は、一般向

けの小さな遊戯の本を『家庭の中での遊び』と題して著わし、この本は、シュトゥットガルトにあった伯父グンデルトの出版社から刊行された。高齡になり、更に眼が見えなくなつてからも、父の遊戯の天分は失われなかつた。私たち子供は別の有り様を知らなかつたし、それをおよそ父親というものの性格とその果たすべき役割に含まれた、当然のものと思つていた。父と無人島に漂着したり牢獄に入れられたり、あるいは森で迷つたり、洞窟の隠れ家に逃げ込んだりした場合、確かに苦勞や飢えは覺悟しなければならぬだろうが、間違ひなく、退屈や空疎感を怖れる要はなかつたろう。父は私たちのために次々と遊びを考案してくれるだらう。またそれは、縛られたり、暗闇の中にいなければならぬ場合でも変わりない。謎なぞを解いたり、案出したリ、言葉で遊んだり、記憶力を試したりする、器具を何ら必要としない遊びこそ、父は最も好んでいたのである。さらに、補助的な道具や遊具がどうして必要な遊びでも父は常にできるだけ単純なもの、自分で作ったものを喜び、店で売られている工場製のものには、ある種の嫌惡を抱いていた。甚やハルマのよくなゲームも、私たちは長年、父が自ら作り、彩色したボードやコマを使って遊んだのである。

ちなみに、ゲームのルールに守られ、かつ、穏やか

に強制されながら、打ち解けて人と一緒にいるのを好む父のこの性向は後年、その子供のひとり、末の息子の特徴とも性格ともなつた。子供の世話をしたり一緒に遊んだりするのが最良の休養であり喜びであり、人生において与えられなかつた多くのものの一種の代替物だつたという点でも、弟ハンスは父に似ていた。ものおじし、時には少々怖がり性だつたハンスが、子供たちしかいなくなり、子供が彼になじんでくれると、見る間に、持てる空想力と快活さを最大限に發揮し、子供たちを惹きつけ夢中にさせ、自分も打ち解けた、全く幸福な樂園のような氣分に浸つていた。そんな時のハンスは誰も抗えないくらい好もしく、彼の死後、その様子を語る人の言葉には、それが冷靜な批判的な人の場合でも、ある確かな温もりが表われたのである。

さて、父は私たちを連れ、散歩をしていたのである。決して丈夫ではなかつたが、大部分の道で乳母車を押していたのは父だつた。車には、にこにこ戸外の明るさを見回しながら小さなハンスが横になつていた。アデーレは父について歩き、一方私は中庸のアンダンテの歩調になかなかなじめず、先へ駆け出したり、面白いものを見つけて立ち止まつたり、車を押させて欲しいとねだつたり、疲れやすい父のことを考えずに

腕や上着にしがみついたり質問攻めにしてたりしていた。あの散歩（同じような幾千もの散歩のひとつだった）の折り何を話したのか、何も記憶に残っていない。この日と散歩のことで私の、そしてアデーレの中に残っているのは、もの乞いとあの体験だけである。私の幼い頃の思い出の画帳の中でそれは、最も印象の強い、最も刺激力のある映像のひとつだ。実に様々な風な思索や思考を刺激するのである。およそ六十五年を経た今日でも、ここに書き留めている思考へ私を駆り立て、頭を悩ましながらも、こうして書き記すようしむけたように。

私たちはのんびり歩いてきた。陽が照り、球形に刈り揃えられた路傍のアカシアの一本ごとに影をそばに描き、それが、この植樹された通りからいつも私が覚えていた、妙に四角張った規則性や直線的美学という印象を更に強めていた。いつもの、日常のこと以外何も起きなかった。郵便配達父に挨拶したり、堂々とした美しい馬四頭に引かせたビール醸造所の馬車が踏切で待たねばならなくなって、私たちにはこの素晴らしい生き物を嘆賞する時間ができたりした（馬はまるで挨拶をしたり話をしたりしたがっているように私たちを見つめることもあった。また私には、足を木材のように削られ、あんな無骨な釘を打たれても平気だと

いうのだけは解せず、気味悪かった）。だが、家のあの通りのすぐ近くまで戻って来た時、いつもとは違う、今までにはなかったことが起きたのだ。

男が一人、私たちの方へやって来た。いくぶん憐れみを誘う、同時にいくぶん嫌な様子の、髭面というよりむしろ久しく髭を剃っていない顔をした、まだ若い男だった。黒い髪と髭の生えぎわの間の頬とくちびるは生々しい赤で、男の服装や動作には、投げやりな、すさんだところがあった。それが私たちには不安でもあり、興味深くもあった。できることなら私は、この男をよく観察して、何かを知りたかった。一目で見取れたが、彼はこの世の、秘密に閉ざされた、底の見えぬ側の人間だった。おそらく彼は、普通の人間にはわからないところがあり、近づかぬ方が無難なのだが、少なからず不幸と困難な境遇にある、あの類の一人だったろう。時折り、もの乞い、呑んだくれ、前科者と呼んでいるのが聞こえて来たが、私たち子供の誰かが耳を澄ましているのに気づくと、皆すぐに話を打ち切ったり、声をひそめたりするのだった。いかに私が小さかったとは言え、脅威と圧迫感を覚える、この世間の他ならぬあの側面に対しては、子供らしい自然な好奇心だけを抱いていたのではなかった。今日思うに、既に幾ら

か予感していたのだ。警戒と同時に同胞の感情を呼び起こし哀れでもあれば危険でもある、何とも判定し難いこのような現象、こうした、ぼろを着た、すさんだ脱落者たちも「正しく」、また意味があるといつこと、また、神話には彼らの存在が絶対に必要であるということ、世界という巨大な芝居には王と同様、もの乞いも不可欠である、ぼろをまとった人間も制服をつけた権力ある人と同じだけの意味を持っているということ。そんなわけで私は、怖さと嬉しさが相半ばした、ぞくぞくするような思いで、蓬髪の男が向こうから私たちの方へ歩を定め、幾らか気おくれしたような眼を父に向け、帽子に手をかけながら父の前に立ち止まるのを見ていた。

男の口ごもった挨拶に父は丁寧に応じた。乳母車に寝ていた弟は、車が止まると目を覚まし、ゆつくりと眼を開いた。息を詰め、私はお互いまるで異質に思える二人の男の間に演じられる場面に目を凝らしていた。それまで何度も経験していた以上に強く、一方の方言と、アクセントの正確な洗練された他方の言葉を、ある種内面のコントラストの表われとして、父とその周囲の間にある隔壁の具現として私は感じとった。他方、話しかけられた側がもの乞いを拒絶もせず怖れもせず、非常に礼儀正しく迎え、人間たる同胞と認めているの

は、心踊る素敵な眺めだった。初めの言葉をいくつか交わすと見知らぬ男は父の心を（彼は父を善良な、多分、情にもろい人間だと思つたのだろう）自分の貧しく哀れな境遇や空腹を述べたてて動かそうとし出した。自分の辛さを天に訴えるかのように、呪文のような歌うような何かが話しぶりに加わった。ひとかけのパンも雨をしのぐ屋根もまともな靴もないのです、ひどい状態なのです、誰に頼つて良いかももつわかりません、心からお願ひします、少しばかりお金をください、ポケットは長いこと空っぽなのです。彼は「ポケット」とは言わなかった。「ふところ」である。一方、父は返事をするに「ポケット」の方を使つていた。因みに、私が理解したのは、むしろこの場の音の調子と身振りや表情である。言葉はわずかしわからなかった。

二歳年上のアデーレは、ある意味、父について私よりよくわきまえていた。後年になるまで私が気付かなかったことを、既にその頃、知っていたのだ。つまり、父はまったくといって良いくらい、お金を持ち歩かなかつた、また、それでもやはり持ち歩くような時には、ニツケル硬貨で良いところで銀貨を、小銭の代わりに高額な硬貨を渡したりと、多分に呆れ返るような、また軽率な扱いをしたのである。姉はおそらく、父が一銭も持つていないと疑わなかつたろう。それに対し私

は、もの乞いの嘆きの歌の調子が今度高まり、切々と訴えて来たら、父はポケットに手を入れ、手持ちの大量のフラン硬貨の半分や全部を男の手に握らせるか、帽子に流し込んでやるだろうという期待の側に、随分傾いていた。パンやリンブルク・チーズや靴や、男に人用な全てを買えるだけのお金をである。しかし、その代わりに私の耳に聞こえたのは、男のありとある訴えに、変わることなく丁寧な、ほとんど心をこめて応えている父の声であり、落ちつかせなだめようとしているその言葉は、最後には短い、うまく整った弁明となつたのだつた。この弁明の中心点は、後に私たちが子供が思い出し、推し量つたところでは、こうだつた。「持ち合わせがないので、お金を差し上げることはできない。また、お金が必ずしも人を助けるわけではない。残念ながら、お金には様々な使い方があつるのだから。例えば食べ物ではなく、飲むために使うかも知れないし、そのようであれば、自分は決して手を差し出したくない。しかしまた、本当に空腹で苦しんでいる人を斥けるのも自分にはできない。そこで提案ですが、近くの店まで自分について来て下さい。少なくとも、この日飢えないですむだけのパンをそこで用立てましょう」

この会話の間、私たちはずっと、広い通りの同じ場

所に立つていた。そのため私は二人の男性をつぶさに眺め、互いに比較し、その外貌や声の調子や言葉をもとに自分なりに色々考えることができた。無論、このやりとりにおいて父の優位と権威に一点の疑念も生じなかつた。父は間違ひなく、単に服装も態度も立派な礼儀正しい人であるばかりでなく、相手をより真剣に受けとめ、より正確により良く相手を理解し、それに、底意なく率直に考えを言葉にしていたのも父だつた。

しかし、これに比べもう一方には、これまで述べたような粗野な感じがつきまとつていたし、その様子や言葉の後ろに何か随分強いもの、生々しいものを持つていた。どんな理性や礼儀よりも強く生々しいものである。それは彼の悲惨な生活であり、貧しさであり、もの乞いという役回り、この世のありとある不幸（当事者に責があるものもそうでないものも含めて）の代弁者という職務であつた。そしてそれが彼にある種の重みを与え、父の側にはないジェスチャーや声の調子を見つけ出す一助となつていたので、これに加えて、このようなすべてを超えて、非常に美しく、また緊迫したものの乞いの場の進行につれ、乞う人と乞われる人の間に一種、名づけ難い類似性が、いや、兄弟のような親密さが次々と生まれて来た。部分的にそれは、父が哀れな男から話しかけられても、嫌がりもせず、眉間

に敵も寄せず、相手に耳を傾け、是認し、自分と相手に何ら距離を置くことなく、聞いてもらい同情を得る彼の権利を、いわば当然のものと認めたためである。しかし、それは取るに足らぬ程度でしかなかった。仕事をもち、日々十分に食べられる、不足ない人たちの世界から脱落したこの黒髪、半髭面の貧乏な男は、この清潔で小市民的な家並みと通り沿いの庭の只中にあつて一種の異邦人の印象を漂わせていたが、父もとうの昔から、確かに随分別の形ではあれ、一個の異邦人だった。違つた出自の人間だった。ともに暮している周囲の人々と同じ土壌から生い育つたのではなく、取り決めたものともつづいた、ゆるやかな結びつきを持っているだけの人間だった。さらに、どこか反抗的で無頼の徒といつた外貌のもの乞ひの背後に、それでも素朴な自然さ、無邪気さが感じられたように、父も、敬虔さ、礼儀正しき、理性といつた構えの後ろに子供らしいところを多く蔵していたのである。ともかく（何故なら、このような頭を使った考えをそのころの私は、当然、持つていなかった）、二人が互いに、おそらくすれちがいの話をしている間に、徐々に私は両者の奇妙な結びつきを強く感じるようになっていった。そして、二人とも一銭のお金も持つていなかった。

初対面の男と言葉を交わしている間、父は乳母車の

縁に身を持たせていた。パンをひとかたまり差し上げようと思うが、このパンは自分を知っている店で受け取らねばならない、だから同道していただきたく父は男に説明した。そう言いながら父は乳母車を再び動かす、向きを変え、アウ通りへ向かった。男は反論せずついて来たが、また幾分、ものおじするような様子にもどり、見るからに十分には満足していなかった。お金をもらえなかったのがっかりしていたのだ。私たち子供は父と乳母車にびつたり寄り添い、知らない男に近づき過ぎないようにしていた。男は先ほどのパトスを放棄し、今は無口というより不機嫌になつてしまつていた。私はそれでも、彼をひそかに観察し、考えをめぐらした。この男とともに非常に多くのものが私たちのすぐそばに踏み込んで来たのだ、顧慮すべき（考量されるべき」と同時に「憂慮すべき」でもある）非常に多くのものが。そして、もの乞ひが口をつくみ、機嫌の悪そうな様子になつてしまつたこの時、彼への私の好感は再び薄れ、男はまた父とのあの共通性から遠のき、信頼の置けぬ彼方へ移つて行つた。私が見たのは人生の一片だった、成人した大人たちの人生だった。そして、そうした大人の人生が私たち子供の周囲でこのように原初的な本源的な私たちを取るのはいきわめて稀なので、私は深く惹きつけられたのだが、それ

までの晴れやかさと信頼は消えてしまっていた。晴れ渡った日に突如、雲のヴェールが光と陽気を遮り、見る間に消し去ってしまうように。

もちろん、親切な父はそんな考えを何ら懐いていないようだった。曇りのない顔は、そのまま朗らかで好意的であり、歩調も乱れず、軽やかだった。こうして父と子供たち、乳母車、そしてもの乞いの一個の小さなキヤラバンはアウ通りへ向かい、通りに入るとさらに、大小のバンから石板やノート、おもちゃまで実に様々なものを売っている、私たち皆が知っている店までやって来た。ここで私たちは止まった。父は男に、店から戻るまで少しここで子供たちと待っていてくれるように頼んだ。アデーレと私は目を見合わせた。どちらにとっても全く良い気持ちではなかった。少し不安だった。いやむしろ、かなり不安だった。私たちに何も起こるはずがないかのように、悪い男たちが子供を殺したり、さらって売ったり、盗みやもの乞いを強要したりするなど、まだ一度もなかったとも言つうに、私たちをこの知らない男と一緒に放っておくなど、父にしては奇妙であり、全く理解できないと私は思った。そこで私たちは自分の身を守り、また、一番下の弟を守るために乳母車の両側に（車を絶対に手から離すまいと思っていた）びったりと身を寄せた。

店の入口までの石段を父はもう上ってしまった、ノブに手をかけ、中へ入ってしまった。私たちはもの乞いと残された。まっすぐな長い通りに誰も見当たらなかった。心の中で私は、宣誓の文体で、男らしく勇敢でいようと自分に言い聞かせた。

こうして私たちは皆、立っていた。一分ほどだったろう。知らない男には全く気付かず、自分の小さな指で楽しげに遊んでいる弟を除いて、私たちの誰も良い気分ではなかった。思い切つて私は無気味な男を見上げてみた。すると、その紅潮した顔に不安と不満がつつてきているのがわかった。気に入らなかった。本当に心配になった。相異なる衝動が彼の心中でせめぎ合い、行動となつて噴き出そうとしているのが見てとれた。

だがその時、彼の感情も思考も終つてしまつていたのだ。ある決心が閃いたのだ。びくりとするのが、はつきりと言えた。しかし彼が決め、この時実際にやったことは、私が、考えていたとも期待していたとも怖れていたとも言えるすべての正反対だった。起こり得るすべての中で、もっとも意外きわまることだった。アデーレと私の二人にとって完全に思いもかけぬことだったので、私たちは身じろぎもせず、声も立てず、立っているばかりだったのである。身体をびくりと震わせ

たもの乞いは、哀れを誘つ靴をはいた足の一方を上げ、その膝を引き寄せ、握りしめて拳にした両の手を肩のあたりまで引き上げると、彼の外見からはとても想像できなかったほどの速さで、長くまっすぐな通りを駆け下りて行った。逃げ出したのだ。走った。追われているように走った。そして次の十字路に着くと、永久に私たちの眼界から消え失せてしまった。

これを見て何を感じていたのか、言葉にしようがない。驚きもすれば安心もし、呆れもすれば感謝もしていたが、また同時に失望もしていた。無念だったと言ってもよい。そしてこの時、晴れやかな顔で手に長い白パンをかかえ、店から父が戻って来た。一瞬、驚いて、私たちからこの次第を聞き、笑った。結局それが父のできる最良のことだった。しかし私は、もの乞いとともに自分の魂が走り去ったような気持ちだった、未知の彼方、世界の深淵の中へ。そして、以前、私が踏み切り番の差し出す一切の食べ物を前に逃げ出してしまったように、あの男が何故、ひとかたまりのパンから走り去ってしまったのかと思ひ巡らすようになるまで、長い時間がかかった。何日、何週間を経て、この体験は鮮やかなまま、私を惹きつけ続け、後年、私たちはいかにも納得の行く理由づけを確かにあれこれと案出しはしたが、今日まで魅力を減じなかったの

である。もの乞いが走って消えて行った、深淵と秘密の世界は私たちを待ち受けていた。表側のあの、愛らしく無邪気な生活を、それは覆い尽くし、消してしまつた。私たちのハンスを嘸み込んでしまった。そして、老年の今日まで踏み止まろうと心がけて来た私と妹と姉も、自分と自分の魂の中の火花が、そいつに圧迫され陰らされているのを知っているのである。

中断された授業時間

老境に入り、どうも私は、すべての老人と同じようにどうしても子供頃の思い出しに気持ちがいってしまうというだけではなく、いわば罰として、以前のシャープをフラットに、そしてフラットをシャープに置き換え移調した上で「物語る」という問題のある技術をもう一度用い直し、罪を償わずにはいられないようだ。

「物語る」行為は聞き手を前提とし、また、語り手にある種の勇気を要求するが、その勇気が彼にもたらされるのは、彼と聞き手がある共通の空間、共通の共同体、また慣習や言語、考え方に包まれている場合に限られる。ゼルトヴィラ物語の語り手を代表とする、若い日に尊敬した模範たち（私の敬愛は今日も変わらずな）は、かつて私の敬虔な信仰心を永きにわたり支え

てくれた。私も彼らと共通の地盤に生まれつき、その系譜に属しているのだ、私も物語を語る時には、私の読者と共通の故郷に住んでいるのだ、私が読者の前で奏でる楽器とその音楽の記譜法は、私と同じく読者にも自明であり、彼らもそれになじんでいるのだ。なるほどそこでは、明と暗、喜びと悲しみ、善と悪、やる側とやられる側、敬神と不信仰が小学校の教科書や子ども向けの本の道徳説話ほどに完全に無条件に、くつきりと色分けされ対照されているわけではなかった。ニコアンスがある、心の動きがある、殊にユーモアもある。しかし、根本的な疑いはなかったのだ。聞き手は理解するだろうか、あるいは、私の物語は語ることでできるものだろうかという疑いはなかった。たしかに、私の物語は実際、「前提、緊張、解決」という、筋の確かな骨組みに乗って、大抵、全く感じ良く進行し、私と私の読者に、かつて語ることがゼルトヴィラの巨匠に、また、それを聴くことが彼の読者に与えていたと匹敵するくらいの楽しみをもたらしてくれていた。そして、抗いながら、きわめてゆっくりとではあったが、年とともに私は洞察するようになった。私の生き方と語り方は互いに適合していなかった、うまい語り口のために自分の見聞や経験の大多数を、多かれ少なかれ、ねじ曲げてきていた、それ故、自分は語るこ

とを諦めざるを得ないか、「良い語り手」ではなく「悪い語り手」になると決断しなければならないとこるにいたるのだ。例えば『デーミアン』から『東方への旅』までのための試みは、私を実際に、美しく良い伝統から徐々に乖離させていった。そのため、今日、私が何かのひどく小さな、十二分に独立した経験を書き留めようとする場合でも、芸術的な意図や手段はすべて掌から流れ落ちてしまい、経験されたことから、ほとんど化け物のような風に、幾つもの声部がからまり、曖昧に複雑になり、聞きわめがつかなくなってしまう。それを甘受するよりない。この数十年というもの、単なる物語の術以上に古く、また重要な様々の価値とかけがえのないものまで疑わしく不確かとなってしまうのである。

ある午前のこと、カルプのラテン語学校の、あまり好かれていなかった私たちの教室で、私たち生徒は筆記の課題に取り組んでいた。かなり長期の休暇がおわって数日後だった。少し前に私たちには青い成績表が渡されたばかりで、それに父親の署名をもらわねばならなかった。教室に閉じ込められたままの退屈になじみ直すにはまだ不十分で、それだけに一層、強くそれを感じていた。まだ四十歳にはほど遠いものの、十一、

二歳の私たちには大年寄りに思えた先生も、不機嫌というより気詰まりな様子だった。一段高い玉座にまします彼が私たちには見えていた。黄色の顔で何冊ものノートにかがみこみ、受苦の表情であった。若い奥さんを亡くしてから彼は、幼い一人息子、額が高く、青くうるんだ眼の青白い男の子と二人きりで暮らしていた。この余裕のない男は、不幸せな、切羽つまつた様子で、その崇高な孤独の中に座していた。尊敬を受け、しかしまた恐れられていた。気分を損ねたり、あるいは、いきり立ったりすると、時には、人文学者を絵にしたような風貌を破って地獄のような荒々しさが閃き、本性をあらわすことがあったのである。インクと少年と靴革の匂いが漂う部屋は静かだった。ごく稀に緊張をほぐす物音があった。埃っぽい縦材の床板に本が落ちた音、ひそひそ話の声、気持ちが悪かれて思わず見回したくなるような、無理に押し殺した笑いが喉を突く声。そして、こうした物音はどれも、玉座の教師の耳に入るや、すぐに制止された。大抵は、軽く一瞥したり、顎をしゃくくって顔で警告したり、脅すように指を上げれば済んだ。咳はらいや短い言葉が出る時もあった。あの日、クラスと先生の間にあったのは、幸い、必ずしも嵐の雰囲気というほどのものではなかった。しかし、あれこれの不意打ちや、おそろくは望ましい

とは言い難い事態が生じるかも知れない、軽く緊迫した空気はあった。そして私にとつてこれが、完璧無比の調和や静穏に比べ好ましくないのかどうか、はっきりとわかつてはいなかった。危険な情況だったのかも知れない、何かが起こったかも知れない。しかし結局、殊にあのような筆記課題の時間には、中断や驚きをもたらすもの以上に（それがどんな性質であつても）、少年だった私たちが心の底から待ち望んでいるものはなかったのだ。余りに長く、厳格に、黙って席に座しておくよう強要されている少年たちの退屈は大きく、動きたくてたまらない気持ちを押し殺しておくのは辛いだけだ。

板張りの砦といったような、その物見櫓で職務をこなしながら、教師が私たちにどんな課題を与えていたのか、今は覚えていない。ともかく、クラス全員がいたのだから、ギリシア語ではなかった。ギリシア語の時間には、私たち四、五人の「古典学者」だけが師に向き合っていたのだ。それは私たちがギリシア語を学んだ最初の年だった。そして、私たち「ギリシア人」もしくは「古典学者」と他の同級生の分離は、学校生活全体にある新しいおもむきを与えていた。ある面で、私たち幾人かのギリシア人、未来の牧師や文献学者、また他の学問の徒たる私たちは、この時既に、将来、

皮なめし職人や織工、商人、あるいはビール醸造業者となる大きな集団から区別され、いわば優遇される地位に上げられていた。これはひとつの榮譽であると同時に要求と激励を意味していた。私たちはエリートであり、職人仕事や商いより高尚なことがらをなすべく定められた者だった。だが、この榮譽には、当然ながら、それなりに問題ある、危険な側面もあったのである。遠い将来、音に聞くほどに難しく厳しい試験がいくつも待ち受けているのを私たちは知っていた。とりわけ、恐ろしい州試験では、シユヴァーベン州全土の人文教科を学ぶ生徒が選抜のためシウトウツトガルトに集められ、幾日もの試験によって少数の真のエリートが精選されるのだった。大多数の受験者には、その結果に全将来がかかっている試験だった。この狭き門をくぐれぬ者の大部分にとつて、それは同時に、計画して来た専門科目の勉学を断念すべしという宣告だったのである。そして、私自身が「古典学者」、つまり、将来エリートになるべく、さしあたり印をつけられた生徒の一員となつて以来、おそらく兄たちとの話のせいでろう、もう何度も自分で思い浮かべてみていたのである、「古典学者」にとつて、資格を認められながらもまだ選抜されてはいない者にとつて、再び名譽称号のない身となり他の多くの俗人どもの中に俗人となつ

て埋没し、同類となり、私たちの学校の最年長学年の席に戻つて来るのは、実に辛く苦しいに違いないと。

それ故、私たち少数の「ギリシア人」は、年度の初めから、榮譽を目指すこの狭い道を歩みながら、そのせいでクラスの先生と、それまでになかった、ずっと親密な、同時にずっと扱ひの難しい關係を持つようになつていた。彼が私たちにギリシア語を教えたのである。このため少数の私たちは、最早、少なくともその量をもって全体として教師の權威に対抗できるクラスや集団から離れ、短期間のうちに私たちの一人一人を、他の全同級生よりはるかに詳しく知るようになった男に、何の防具もなく、弱く、各々一人で向き合つていたのだった。心高鳴ることもしばしばだったが、それ以上に恐ろしいくらい不安な方が多かつたこの時間、彼は私たちに知識と心配りと監督において、向上心と愛において、持てる最良のものを注ぎ込んだが、同じくらいにムラ気と不信と過敏さも振り向けた。私たちは召された者、未来の彼の同僚、他の者より才能か、あるいは向上心のある、より高いもののために運命づけられた小集団だった。クラスの他の全生徒より私たちに彼は自らの力と配慮を尽くしたが、同時に私たちには何倍もの注意力と熱心さと学習欲を、更に彼自身と彼の使命についての何倍もの理解をも期待していた。

私たち「古典学者」は、決められた学校教育の最低限のところまでどうにかこうにか先生に引きずっていつてもらう、どこにでもいる生徒であつてはならなかつた。与えられた、ある高貴な使命という意味において自らの特別な地位を自覚しつつ、感謝の念を抱きながら努力する、狭い道を行く者でなくてはならなかつた。燃え立つ向上心と知識欲を常に押し止め馴らしてやらねばならぬような「古典学者」を彼は持ちたかつた。精神の糧のどんな小さな一片をも熱烈な食欲を以つて待ち受け、摂りこむや、すぐに新たな精神のエネルギーに変えるような生徒たちを。ともにギリシア語を学んだ数人の例えば誰彼が、どこまでこの理想に應えるつもりであつたのか、そして、それだけの才があつたのか、私には今わからないが、他の学友も私と大差はなかつたと思つ。彼らは「古典学者」となつたことである種の向上心と、また、自分の地位についてある種の慢心も持つただろう。自分をなにか他よりも優良な、価値ある者とも感じ、恵まれた時にはこの高慢から一種の使命と責任の感情を紡ぎ出しもしただろう。しかし、詰まるところ、私たちはやっぱり十一、二才の生徒だつたのであり、「古典学者」ではない同級生とさしあたり、全くと言って良いほど異なつてはいなかつたのだ。私たち誇り高いギリシア人も、自由

な午後とギリシア語の特別授業のどちらを選ぶかとなれば、誰も一瞬の躊躇もなく、嬉々として自由時間を取つただろう。間違ひなく、私たちはそうしただろう。だがしかし、あの別のもののなにかは、私たちの若い魂にやはりあつた、先生が私たちにひどく切実に、ときにはひどく性急に期待し求めていたものの幾らかは。私について言えば、人より頭が良かったので年齢以上に成熟していたのもなかつた。コッホのギリシア文法や「古典学者」の自尊心から私をおびき出すには、およそ、午後いつぱいの自由時間という樂園すら持ち出すまでもなかつた。それでも私は時々、また私という人間のどこかでは、東方への巡礼者でありカスターリエンの住人であり、自覚せぬままに、プラトンのアカデメイアに連なる世界の一員となり、その史料編纂者となるよう準備していたのである。ギリシア語のある単語を耳にしたり、先生の無愛想な訂正が延々と続く私のノートにギリシア文字をなぞつている時、時々、一種、精神の本来の故郷にいらつてもいふような魔法にとらわれ、何の留保も思惑もなく、精神の呼び声と師の導きに従おうといふ気持ちになつた。このように、私たちの愚かしく慢心したエリート意識にも現実の選抜された地位にも、仲間から一人引き出され、ほとんど恐いばかりだつたスコロ世界の統括者

に引き渡された、不安な私たちの立場にも、それでも一筋の真の光がさし込み、真の召命の予感と真の精神化の息吹きが宿っていたのだ。

この日の退屈で淀んだ朝の授業時間（とうに終えた課題のことは考えず、教室の押し殺した小さな物音や、鳩の飛ぶ羽はたぎ、鶏の鳴き声とか、あるいは御者の鞭の音など戸外の世界の遙かな柔しげな響きに耳を澄ませていたが）、その時は無論、天井の低いこの部屋が、かつて良き霊たちに支配されていたとは見えなかった。一筋の高貴さ、一筋の精神の光が宿っているのは、幾分疲れたような、心配ばかりのような先生の顔だけだった。その顔を私は、彼が時々上げる眼差しをうまく避けるよう用心しながら、同情と疾しさの混じった思いで観察していた。何を考えるというのでもなく、何らかの意図を持つてもなく、ただ没頭して眺めていた、ハンサムではないが、気高さがなはいええない、この先生の顔を私の心の画帳に写し取るという課題に専念していた。そしてその顔は、それから六十年を経てもそこに保管されている。角のはつきりとした張りのない額に小さな束となって垂れた髪、まつげが少なく、幾らかしぼんだ瞼、黄色みがあった白い瘦せた顔、非常に明瞭な発音と、また、諦めと嘲りのこもった微笑を心得た、きわめて表情豊かな口、そして丁寧に髭

を剃った、がっしりした顎。その像は、多くのもののひとつとなって私のうちに刻みこまれていた。そして、何年も何十年も用いられぬまま、その茫漠とした文書館に眠りつづけ、再び時が来て呼び出されると、常に完璧に生き生きと鮮やかに現れて来るのだった。あたかも、一瞬前、まばたきひとつする前には、そのオリジナル自体がまだ眼前にあったかのように。そして、教壇上の男を観察しつつ、感情の高ぶりを一瞬間かせながらも精神の力と訓育によつてそれを抑えこんだ、その忍耐の表情を私は自分に取り込み、自分の中で永続する像に変えていると、味気ないこの部屋が、ところがさほど無味乾燥でもなくなり、一見、退屈で空疎な時間も、やはり、さほど空疎、退屈ではなくなっていた。この教師が他界して数十年になる。そして、あの年度の「古典学者」の中で今も存命なのは、私ただ一人だと思ふ。私の死をもつて、ようやく、彼の映像は永久に消え去るのだろう。あの時、ほんの短い間だけ共にギリシア語を学んだ仲間の誰とも、私は交友を持たなかった。一人について私が知っているのは、もとうとうに世を去ったことだけ。別の一人は、一九一四年、戦争で命を落したという。そして、また別の一人、私が好感を抱き、また私たちの中でただ一人、当時の私たち全員の目標に実際に到達し、神学者とな

り牧師となつた級友に関して、後年、私はその風変わりな独自の生涯の断片を耳にした。努力を要するどんなものよりゆとりを優先し、生活の様々な小さな楽しみを味わう方に長けていた彼は、大学時代、学生組合の仲間には「木偶」とあだ名された。結婚はせず、神学者としては村の牧師の地位を得、多く旅行をし、常日ごろの職務怠慢をとがめられて、まだ若く健康なうちに職を退き、その年金請求をめぐって教会当局と長い間争い、退屈に悩み始め（少年時代から彼は並み外れて好奇心が強かった）、一部は旅行することで、また一部は日々数時間、法廷で裁判を傍聴するという日課によつてそれをまぎらわそうとしたが、退屈と空虚さはそれでも募つていくものだから、六十才頃、ネッカー川へ身を投げたのだつた。

うつむいた教師の頭部を見つめていると、先生が顔を上げ、クラスを見渡したので、驚いて私は不意を打たれたように目を落とした。

「ヴェラー」、彼の呼ぶ声が聞こえた。最後列の椅子のひとつから素直にオットー・ヴェラーが立ち上がった。お面のように、彼の大きな赤い顔が皆の頭上に浮かんだ。

先生は教壇の自分のところへ来るように彼に合図をし、ヴェラーの顔の前に青の小さな成績表を出し、小

声で「二、三、質問した。同様にささやき声で、明らかに動揺した様子でヴェラーは返答した。少々目をおどつかせ、そしてそれが彼に、ある種不安な困つたような感じを生んだように私には思えたが、こんな様子は私たちの知る彼にはなかったものだった。ヴェラーは平静な性格で、他の者なら痛みを覚える多くのことにも平気な皮膚を持つていた。因みに、この時、心配でいっぱい表情を見せていたのは、他にない独特の顔、私の最初のギリシア語教師の全く類を見ないそれと同じくらい、それ自体忘れられない顔だった。顔も名前も、その名残りすら私の記憶に残さなかった級友は、当時でも少なくなかった。私は翌年には別の町の別の学校へ送られたのだったから。だが、オットー・ヴェラーの顔は、今日でも完全に明瞭に思い浮かべられる。少なくともあの頃、何より、その大きさが目を惹いた。横と下方向へ肥大していたのだ。つまり、顎骨の下あたりがひどくふくれ、このふくらみのため、もともとより顔がずっと広くなつていたのである。この様子が気になつて、君の顔はどうしてしまつたのかと一度たずねたのを思い出す。そして、覚えている彼の答えは、「これ、腫れているんだ。わかるね。僕には腫れものがあるんだ」。この腫れものを別にしても、ヴェラーの顔は全く絵になつていた。顔中が強烈に赤く、髪は

黒く、柔和な眼、非常にゆっくりとした眼球の動き、それにその口は、赤いのに老女の口のようにだった。腫れていたせいだろう、彼は顎をいつも幾分上げており、そのため首を全部見せていた。この姿勢のおかげで顔の上半分は後ろに反りかえって、ほとんど人に印象を与えなかったが、膨らんだ下半分は、肉がたくさん付いているにもかかわらず、確かに植物的かつ非精神的ながらも楽しげな、人の良い感じで愛嬌がないわけではなかった。間延びのした方言口調でおとなしい性格の彼に私は好感を抱いていたが、それほど一緒にいたわけではない。住む世界が違っていたのだ。学校で私は「古典学者」の一人であり、席は教壇に近かった。ヴェラーの方は現状満足の無為の徒の一員であり、この彼らの席は一番後ろで、教師の質問には稀にしか答えられず、クルミや干し梨やそれに類したものをよくズボンのポケットから出してはぱくつき、積極性もなければ、ひっきりなしにしゃべったり小声で笑ったりして先生に面倒をかけるのも稀ではなかった。そして学校の外でもオットー・ヴェラーは、私と別の世界の住人だった。住まいは町外れの駅の近くであり、私の住む地区から遠く離れていた。父親は鉄道職員だった。彼を私は一度も見たことがなかった。

小声で先生と短く話した後、オットー・ヴェラーは

席へ帰された。むっつりと困った様子だった。先生の方は立ち上がった。あの濃い青色の帳面を手に、何かを探すように部屋を見渡していた。その視線が私に止まった。先生は私のところにやって来て、私のノートを手に取り目を通して、たずねた。「課題は終わったのかな？」私が「はい」と返事をする、彼はついてくるよう合図し、ドアのところへ行くと、奇妙なことに先にドアを開け、出るように私をしむけ、二人で出るどドアを閉めた。

「用事をひとつ済ませて欲しい」、こう言っただけに私の青い帳面を渡した。「これはヴェラーの成績表です。これを持って彼の両親のところへ行ってください。そこで伝言して欲しいのです。ヴェラーの成績の下のサインを本当にお父さんが書いたのが、先生がたずねている」と

先生について、そつと急いで教室へ戻り、木の帽子掛けから自分の帽子を取り、ヴェラーの成績表をカバンに収め、出かけた。

つまり奇蹟が起きたのだ。退屈な時間の最中、先生が思いついたのだ、私を散歩に出そう、午前の明るく美しい世界へ。驚きと幸福のあまり、私はぼんやりしていた。これ以上望ましいことなど、何一つ考えられなかっただろう。檜の踏み段が深くすり減った階段を

二つ跳ね降り、他の教室のひとつから聞こえる、書き取りをさせている先生の単調な声を耳にドアを飛び出し、平らな砂岩の石段を下へ、幸せな有難い思いで素敵な朝へ、さつきまでうんざりするほど長く空疎に思えていた朝へ、悠々と歩き出していった。外の朝は違っていた。授業の時、教室の活気を吸い取ってしまい、その時間を啞然とするくらい長く引き延ばしてしまふ不毛さや隠れた緊張感を感じさせるものは、ここにはなかった。ここでは風が吹き通い、広いマルクト広場の敷石の上を雲の影が駆け、鳩の群は小犬たちを驚かせて吠えさせ、お百姓の荷車につながれた馬は、その前の飼葉桶の藁を食み、職人衆が仕事をしたり、仕事場の低い窓越しに「近所と話をしていた。金物屋の小さな陳列窓には、青い鋼の銃身の無骨なピストルが、まだ置かれていた（値段は二マルク半だそうで、数週間、目に止まっていたのである）。市場のハースおぼさんの果物屋台とイエーニツシュさんの小さな小さなおもちゃ屋も覗かずにはいられないほどきれいだったし、隣の開いた工場の窓の銅細工職人の赤く映えた顔と白い髭は、彼がハンマーで叩き出している釜の銅板と、輝きと赤さを競っていた。いつも陽気で話好きのこの老人の側を通る者は、声をかけるか、少なくともひとこと挨拶を交わさないと、めったに先へ行かせて

もらえなかった。私にも老人は話しかけてきた、「ほう、もう学校が引けたのかね？」そこで、先生から頼まれた用事があるのだと答えると、もののわかった忠告をしてくれた、「それなら余り急ぎ過ぎないほうがいいな、まだお昼までは時間があるから」この勧めにしたがって、古い橋ではしばらく立ち止まっていた。

欄干にもたれ、静かな水の流れを見下ろし、二、三匹の小さなバスを眺めた。深い水底近くに這い、一見、同じ場所に眠っているように身じろぎもしないでいながら、実際はそれとわからないうちに、お互い居場所を交替しているのだ。口を下にしてずっと底を探っているが、時々、姿勢を水平にして全身を見せると、背に濃淡の縞模様が見えた。さえた柔らかなざわめきを立て、水は近くの堰を越え、ずっと川下の島では鴨が群をなしてがやがやとしていたが、そのけたたましい声も遠いために柔らかくならされ、堰を越える川の流れに似て、夏の夜の雨音が音もなく降りしきる雪のように人を包みこみ瞑想と眠りへ誘う、永遠というもののあの魔法の響きを持っていた。立ち止まったまま眺め、立ち止まったまま耳を澄ませていた。この日初めて、私は暫時、時を全く忘れてしまふあの懐かしい永遠の中にいたのである。

教会の時計の音に私は我に返った。私は驚いて、長

居をし過ぎたのではないか、心配になった。自分の用事を思い出した。この時ようやく、この用事とそれに付随するものが私の注意と関心を捉えたのだ。それ以上、道草を食わずに駅の方へ急ぐと、先生と小声で話していたヴェラーの憂鬱そうなあの顔や目を白黒させていた様子や、肩を落としてゐるのと席へ帰って行った彼の姿勢や歩き方がまた頭に浮かんだ。

一人の人間が常に同じだとは限らない、多くの顔と様々の表情や態度を持つことがある、それをこの時初めて知ったわけではない。そうしたことは、自分自身についても他の人についても、ずっと前からわかつていたし知っていた。だが、食べ物でズボンのポケットが一杯で、腫れもので膨らんだ顔をした呑気者のヴェラー、学業など気にもかけず、学校で恐れているのは退屈だけだといった様子の教室最後尾二列の常連の一人、本には一向親しまず、勉強にはまるで無頓着な、その代わり、果物やパン、高いやお金や他の大人向けの関心事となると私たち他の生徒を遙かに凌駕し、ほとんどもう大人同然のあの連中の一人、そのヴェラーにも気分の浮き沈み、喜びと落胆のこれほどの差異、こんなに気になるほど意外な落差があるとは、これは初めてだった。あれこれ思いを巡らせながら、この時私をひどく不安にしたのは、そのことだった。

ほんの少し前、私を驚かせ、ほとんど狼狽させた、彼の飾りのない簡潔な話のひとつを思い出した。川辺の草地へ行く道すがら、仲間たちの集団の中で私たちは少し並んで歩いていた。タオルと水泳パンツを小さく丸めて小脇にかかえ、彼は私の横を彼ならではのゆったりした調子で歩を進めていた。そして不意にちよつと立ち止まると、その大きな顔を私に向け、こう言った、「親父の稼ぎは日に七マルクなんだ」

それまで私は誰が一日にいくら収入があるかなど知らなかったし、この時も七マルクがそもそもどれほどなのかもわからなかった。ともかくも随分けつこうな額に思えた。また、ヴェラーもそれをある種、満足と誇らしげな調子で口にしていたのだ。しかし、何らかの数や大きさを使って自慢するのは私たち生徒の間で軽い感じのお遊びのひとつだったので、彼の言葉はおそらく本当だったろうが、私も黙ってはいなかった。ボールを打ち返すように彼に言葉を返して、父の日収は十二マルクだと言った。これは嘘だった。勝手に考え出したのだが、何も気のとがめは感じなかった。純粹に言葉のやりとりの練習だったのである。ヴェラーは一瞬、考え込んだ。「十二ねえ……確かにそりや悪くないな!」、こう言った時の口調と目つきからみると、私の言葉を信用したのかどうか、疑問だった。彼

は、何とんでも私の化けの皮を剥ごうなどとはしなかった。そのまま放っておいた。疑われても多分しかたのないことを私は口にしてはいたのだが、彼はそれを受け流し、議論するほどの価値も認めなかったのだ。そして、こうして彼は再び優位に立ち、経験を積んだ實際家であり、ほとんど大人である実を示したのであり、それを私はそのまま承認したのである。まるで二十才の大人が十一才の子供と話をしているようだった。だが、私たちはどちらも十一才ではなかったらうか？

そうだ、彼がまるで感情を交えず、随分大人びた口調で語った、もうひとつ別の話がある。これには一層、愕然としたのである。私の祖父の住まいから遠くないところに工場を持っていた、ある機械工の親方についての話だった。近所の人の話を聞いてびっくりしたのだが、この親方はある日、自ら命を断つたのだ。町では何年もなかったことだったし、少なくとも私たちのすぐそばでは、少年の私が日々を送る、いつも大好きな近隣の只中では私にはそれまで考えられないことだった。首をつつたという噂だったが、まだ議論はあった。こんなに珍しい大事件をさつさと分類整理して処理済みにしてしまおうとは誰も望まなかった。まず、その恐ろしさを味わおうとしたのだ。それ故、自殺の翌日にはもう、あわれな故人を近所の女たち、

女中たち、郵便配達夫たちの噂が取り巻いてしまい、そのいくつかは私の耳にも聞えてきた。だがその翌日、私が親方の家と物音ひとつしない閉ざされた工場をこわごわ見ていると、通りをやつて来たヴェラーが機械屋がどんな風によつたのか知りたいかとたずねてきたのである。それから彼は、絶対に間違いないと確信している様子で、親しげにこの次第を私に教えてくれた。「つまり、あいつは機械屋だったから、縄を使いたくなかった。針金で首をつつたんだ。針金と釘とハンマーとペンチを持ってタイヒエル小路へ出て、森の粉ひき場のすぐそばまで行き、そこで針金を二本の木にしつかりと張り渡し、おまけに端の余った針金をペンチできれいに切りそろえ、そしてそれから下がったのき。でも、首をつる時は、わかるだろうけど、大抵、ひもを首の下にかけるんだ、そうすると舌が出てしまふ、ひどいざまだ。で、あいつはそれがいやだった。さて、どうしただろう？ あいつ、首の下の方じゃなく、ずっと上の顎のところで下がった、だから後で舌は出なかった。でも、それでも顔は青黒くなってしまっただけさ」

さて、これほど世の中をこころえ、学校などほとんど気にかけていなかった、このヴェラーが明らかに重い心配事がかかっていた。この前の成績表の下のサイ

ンが本当に父親のものか、疑われていたのだ。そして、ヴェラーが随分重苦しそうに見え、教室の中を席へ戻る時、ひどくしよげた顔をしていたことから判断するに、おそらくこの疑念には正しいところがあった。それであれば、それは単なる疑念ではなく、すなわち、オットー・ヴェラーが自ら父親の署名をまねて書こうとしたという嫌疑、もしくは告発となる。短い喜びと自由の陶醉が冷め、考えられるようになったこの時ようやく、私には級友の思い詰めた苦しげな目つきがわかり始め、厄介で醜悪なことが起きているのだと予感するようになった。できれば、授業中に散歩に出してもらえるような幸運児に選ばれたくなかったとまで望みだした。風がかよい雲の影が駆ける晴れやかな午前時の時と、私が散策していたすてきな朗らかな世界は一変してしまった。私の喜びはどこまでも沈んで行き、代わりにヴェラーの一件をめぐる考えが私を満たした。悲しくなる不愉快な考えばかりだった。たしかに私はまだ世の中を知らず、ヴェラーの実際的な経験の豊かさの前ではほんの子供だったが、年長の少年向けの宗教や道德関係の物語を読んで、署名の偽造は弁解の余地なく悪いこと、犯罪に類することであり、罪人を牢獄や処刑台へ導く道程の一段階であると知っていた。

てる人間だった、呑気な良い奴だった、手の施しようのない、行き着く先が処刑台と決まった男とは思えなかった。署名が本物であり、嫌疑が誤りだと判明するのなら、あれこれと犠牲を払っても良かった。しかし、あいつの心配そうな、ぎよつとした顔を見たのではなかったか、あいつの様子は間違いないはつきりと、不安がある、つまり、良心のとがめがあるということに悟らせはしなかったか？

もしかしてオットーに何かしてやれないかと思いついたのは、歩調をずっと落として鉄道関係の人たちだけが住むその家へ、もうだいたい近づいた時だった。この家へ入りもせずにクラスへ戻り、先生に署名の件は問題なかったと伝えたらと考えた。こつ思う間もなく、胸を締めつける重苦しさを感じた。私は自らこの嫌な一件に関り合いになってしまっていたのだ、自分の思いつきに従えば、私は最早、偶然選ばれた使いでも脇役でもなく、共演者であり共犯者となるだろう。歩調が段々落ちて行った。とうとう家を通り過ぎ、先へのるのる歩きつづけた。時間をかせがなくてはならなかった、まだ考えねばならなかった。そして、実行をもう半ば決心していた、友を救う高貴な嘘を本当にいつてしまったと想定し、その結果と自分を結びつけた後で私は悟った、これは自分の力を超えている。救援者、

救助者の役割を私が諦めたのは賢明だったからではない、結果を怖れたのである。もっと罪のない二つめの抜け道も思いついた。このまま帰って言うのだ、ヴェラーの家には誰もいませんでした。だが、何ということか、この程度の嘘をつくにも、私の勇気は不足していた。なるほど先生は私を疑わないだろう、しかし、それなら何故これほど長く私が戻って来なかったのか、尋ねるかも知れない。良心のとがめを感じながら、暗鬱な気持ちでとうとう私は家へ入り、ヴェラー氏の名を呼ぶと、一人の女性が上の階へ行くよう教えてくれた。ヴェラーさんの住まいはそこだが、仕事に出ているから、奥さんしか会えないでしょうと。階段を上った。殺風景な、むしろ人好きのしない家だった。台所の臭いや、漂白液が石鹸の鼻をつく臭いが漂っていた。さっきの言葉どおり、上の階でヴェラー氏の奥さんを見つけた。台所から出て来ると、彼女は急いでおり、手短に何の用かと訊いた。しかし、先生がオットーの成績表のことで私をよこしたのだと伝えると、エプロンで手をふき、私を内へ招き入れ、椅子を勧め、バターパンかリンゴか何かもって来ようかとまでたずねた。だが私は、もう帳面をポケットから取り出していた。それを彼女に差し出し、署名が本当にオットーの父親のものであるかどうか、たずねてくるように先生が言

われたと伝えた。母親はすぐには了解しなかった。私はくり返さねばならなかった。じつと緊張して聞く、彼女は今度は開いた帳面を目の前に持っていった。何もしようのない私には、彼女を十分に見る余裕があった。母親は非常に長く、身じろぎもせぬまま腰をかけた。成績表を見つめつけ、一言も発しなかったのだ。だから私は彼女を観察していた。すると、息子が彼女にとても似ているのに気付いた。腫れものがないだけである。顔色は赤く澁刺としていたが、そのまま座って何も言わず、小さな帳面を両手で持っている間に、この顔が徐々にゆっくりと張りをなくし、疲れ、老いて行くのが見えた。何分かが過ぎた。そしてとうとう、手にしたものを膝に落とし、私をもう一度見た、あるいは、見ようとした時、大きく見開いた両の眼から静かに止めどなく大きな涙が流れた。成績表をまだ手に持ち、それを子細に点検するような様子をしている間、私にはわかるように思えたが、前に私を襲ったと同じあの想像が脳裡に浮かび、悲しく恐ろしい映像の連なりとなって彼女の心の目の前をよぎって行ったのだ。悪事から裁判へ、牢獄へ、処刑台へ向かう犯罪者の道の情景である。

子供だった私の目には老婆と映った母親に向き合い、私はひどく困惑して座り、その赤い頬を涙が流れるの

を見、何か言うのではないかと待っていた。長い沈黙がひどく耐え難かった。だが、彼女は何も言わなかった。座って泣いていた。もう我慢できなくなった私がとうとう自分から沈黙を破り、もう一度、ヴェラー氏自ら成績表に署名されたかとたずねると、母親は一層苦しげな、悲しい顔をして、幾度も首を横に振った。

私は立ち上がった。そして彼女も立った。私が手を差し出すと、彼女はそれを取り、たくましく暖かな自分の手にしばらく握りしめていた。それから彼女は忌まわしい青色の帳面を取りあげ、そこから幾粒かの涙をぬぐい、ひとつの長持ちのところへ行き、それから新聞紙を一枚取りだし、二つに裂き、その一方を長持ちへ戻すともう一方で小ぎれいに成績表をくるんだのである。私はそれをもう一度、上着のポケットへ入れるわけにはいかず、丁寧に手で持っていた。

私は家を出た。帰路、堤も魚も、陳列窓も銅細工職人も見なかった。報告をした。随分時間がかかったとがめらなかつたのは全く失望した。叱られても当然だったし、私にはそれはある種の慰めを意味したろう。つまり、私も少しは一緒に罰を受けたことになるのだから。そしてそれからしばらく、この一件を忘れるよう、ありとあらゆる努力をした。

同級生ヴェラーが罰を受けたのか、どんな罰だった

のか、私は一度も耳にしなかった。私たちはどちらも、このことについて一言も話さなかった。そして私は、遠くからでもひとたび通りの彼の母親に気づくと、顔を合わせないよう、どんなに遠い回り道も厭わなかった。

コクマルガラス

湯治のためバーデンを再訪するからと言って、目新しいことに出くわすかも知れぬという思いは、ずっと以前から、もうなくなっている。「黄金の壁」の最後の一角が新築の家で台なしにされていたり、美しいクアパークが工場に変わっていたりする日がいつか来るだろうが、もはや私はそれを経験しないだろう。だが今回は、川向こうのエネット温泉へ斜めにかかった見苦しい橋の上で、奇妙で素敵な驚きが私を待ち受けていた。湯治をするホテルからほんの数歩のこの橋の上で、パンの切れ端をいくつか鷗に与え、数分間、純粹な楽しみに浸るのが私の日課となっていた。鷗は昼ならいつもそこにいるわけではない、またいるにしても、いつも呼べば応えるというでもない。時には、市営温泉の屋根にすらりと並び橋を見張りながら、道行く人が立ち止まってポケットからパンを出し投げてくれ

のを待っている。群れの若手や曲芸師たちは、そんな時が好きなのだ。誰かがパンのかけらを高く放り上げると、ともかくうまく行きそうな限り、その人の頭上にとどまってみせる。すると一羽一羽、よく見ることができ、できるだけどの鷗にも順番にパンが行き渡るよう配慮できる。そんな時は、眼耳を奪わんばかりの喧騒と目くらましに、けたたましく渦をなす猛烈なエネルギーの一群に押し込められ、餌を求め、甲高く短い叫びを間断なく繰り返す灰白の翼持つ雲の只中で身じるぎもならぬのである。だが、もつと落ちついた、スポーツを好まぬ鷗たちがいつもいる。彼らは騒動から離れ、泡立つリマト川の水面近くを低く悠々と飛び交っている。そこは静かなのだが、競争好きな曲芸師たちが上で取り逃したパン切れが、いつも、ひとつふたつと落ちて来るのだ。別の時もある。そんな時、ここに鷗は一羽も見当たらない。学校やクラブの旅行のようなものか、遠出でもしているのだろうか、リマトのずっと下流で特別豪勢なふるまいが供されているのだろうか、一羽残らず、皆、消えてしまっている。また別の時がある。鷗たちがいるにはいるのだが、屋根にとまるでなく餌をやる人の頭上に群がるでなく、少し下流の水の上にびっしりと群れ飛び、ことごとしく興奮したように騒いでいる。こんな時は、合図をして

もパンを投げても無駄である。そんなもの、連中は気にも止めない。多忙なのだ。鳥なりの事情があるのか、あるいは集会、けんか、投票、株取引といった人間のやるような事情が、何のせいかは知る由もないが、佳肴珍味山盛りの籠を並べようと、連中の胸躍らせる重大な要件やらゲームやらから彼らを惹き寄せるのは不可能だろう。

今回、私が橋へやって来ると、手すりに一羽の黒い鳥がとまっていた。非常に小柄なコクマルガラスである。近づいても飛び立たなかったので、徐々に歩調を落しながら、歩一歩と少しづつ近寄って行った。恐がる様子も用心している風すらもない。好奇心満々で注目しているというだけだ。あと半歩というところで落ちついたもので、小鳥特有のよく動く目で私を品定めし、灰色がかった頭をかしげ、まるでこう言いたげな様子だった、「どうです、ご隠居さん、びっくりでしょ」事実、私は驚いていた。このカラスは人との付き合いに慣れているのだ。話もできるのである。するともう、数人が通りかかった。彼らはカラスと知り合いで、「やあ、ヤーコブ」と声をかけるのである。その人たちに色々とたずねてみて、それ以来、ヤーコブについて私は少なからず知るようになった。人の言うところは、しかし皆、幾分異なっていた。一番知りた

いことには結局、答えがなかった。つまり、この鳥がどこに住まい、どうしてこれほど我々人間になじむようになったのかといつことである。野生なのではなく、エネット温泉のある女性のペットだと言う人がいた。勝手気ままに好きな所を飛び回り、時々、開け放しの窓から部屋に入つて何か食べられるものをついばんだり、そこらにある編み物をむしりちらしてしまつと言う人もいた。あるフランス語圏出身の人物（明らかに鳥類通である）は、知る限り、フリブル山地のみに見られ、その断崖に生息する、非常に珍しいコクマルガラスの種に属していますと断言していた。

一人のことと妻と一緒にのこととあつたが、私はそれからほとんど毎日、カラスのヤーコブに出会い、挨拶し、歓談した。ある時、妻は足の甲のところは模様を切つたデザインのをはいていた。その穴から靴下が少し覗いていた。この靴、そして何よりもこの靴下の島が大いにヤーコブの興味をそそつた。地面に降り、目を輝かせて狙いを定め、懸命につついたのである。私は何度モヤーコブを腕や肩にのせたことがある。彼はコートや襟首や、頬や首筋をつついたり、私の帽子の縁を引っぱつたりした。パンには執着してないが、彼の見える前で鷗にパンをやると、やきもちを焼き、往々にして本当につむじを曲げる。木の実やピーナツ

ツなら彼は受け取り、その人の手から上手についばむ。だが、一番好むのは、何かをついばみ、むしり、小さく壊してしまうことだ。足でおさえて上に乗り、くちばしで素早くせわしなくつつくのである。丸めた紙、ブリッサーゴ葉巻の吸い殻、一片の厚紙や布きれがその対象だ。そして、こうしたすべては（感じてわかるのだが）単に彼自身のためではない。少なくとも常時、数人、時々はたくさん集まつている見物人たちのためでもある。見物人の前で彼は地面や橋の欄干を跳ねながら行き来し、大入りの見物客を愉快に思い、その一人の頭や肩へ飛んでとまつては地面に降り、私たちの靴を丹念に調べて、随分な力でつつく。つついたりむしつたり、引っぱつたり壊したりするのは楽しみである。悪戯小僧めいた楽しみを覚えながらやっている。しかし、観客も必要なのである。観客は賛嘆し、笑い、大声を上げ、ヤーコブの友情のしるしを見て甘い気持ちとなり、その次に彼が靴下や帽子や掌をつつくと、またびつくりしなくてはならないのである。

身体が倍も大きく、力も何倍も強い鷗をヤーコブは少しも怖れない。鷗の群れの只中を抜け高く飛んで行くこともよくある。そして鷗は彼に何もしない。およそパンに触れもしない彼は、たしかにライバルでもゲームの邪魔者でもない。さらに彼は、私が思うに、鷗に

とつても一種特殊な存在、何か稀な、謎めいた、少々気味悪いものなのだろう。彼は孤独である。いかなる群れにも属さない。いかなる習慣にも、いかなるきまりにも、いかなる定めにも従わない。多数の中の一羽であった同族の群れから彼は離れてきた。そして人間の群れへ身を向けた。人間は彼を称え、供物を捧げる。気が向けば、彼は道化や曲芸師として役目を果たす。人間をからかうが、いくらでも人間から誉めてもらいたい。黒く、もの怖じもせず、孤独に彼は白い鷗と色とりどりの人間の中にいる。彼の種の唯一のもの。自らの意志か、あるいは運命によって群れと故郷を失ったもの。臆した風などなく、眼差し鋭く、彼は欄干にとまり、橋の往來を見張っている。彼を氣にかけずに通り過ぎるものがほんのわずかで、大抵の人間が彼ゆえにしばらくの間、また往々けつこう長く立ち止まり、驚きの目を見張り、彼のことで頭を悩ませ、ヤーコブと名前をつけ、ためらった揚げ句によく先へ行こうと決心するその様を喜んでゐる。一羽のカラスとして当然である以上に人間を重視してはいないが、さりとて彼は人間なしで平氣というのではないらしい。本当にたまにしかなかったが、他に誰もいない時には、私は少々、彼と話ができた。何年も家でオウムを飼っていた子供の頃、半ば習い覚え、半ば考え出した鳥の

言葉を使つたのだ。喉の奥の音を含む、短く旋律風の音の連なりでできた言葉である。鳥のヤーコブの方に身をかがめ、私は親しみをこめて私流に訛つた半端な鳥語で話しかけた。彼はそのきれいな頭を後ろへ引き、関心を持つて耳を傾け、考えをめぐらしていた。しかし、彼の中の悪戯者の小人が不意にまた目を覚ました。私の肩に跳び乗ると、しつかり掴み、キツツキのような調子で首筋や頬をつついたのだ。私は我慢できなくなって、激しく身体を動かし追い払つたが、彼の方は向いの欄干で楽しそうに次のゲームへ身構えていた。しかし同時に彼は、新たな人の群れが近づいていないか、新たな勝鬨をあげるチャンスはないかと橋の両側の歩道へすばやく目をやった。自分の情況を彼は精確に知っていた。我々、無骨粗大な動物へ及ぼす自分の権威、不格好な異種生物の群れの只中にある自分の唯一性とエリート性を。そして彼は、軽業師であり俳優である彼は、贅嘆し感動し、あるいは笑う巨漢たちが自分のまわりを立錐の余地なく、黒山のように取り巻くと、彼はそれをとても楽しんでゐた。少なくとも私の場合、彼の思惑どおりだった。私が彼を好きであり、訪ねて行つても見当たらなければ、がっかりして悲しい思いを持つようになつていたのである。自分と同じヒトの大多数に対する以上に、彼に私は強い関心をお

だいていた。鷗たちの羽ばたきに包まれている時、私がいかに鷗を評価し、その美しく野性的な、激しい生命の表われを愛していたとしても、彼らに個別の性格はなかった。彼らは同類の集合であり、群れであった。なるほど、よく見ていればその中の一羽を個体として観察し感嘆したりもしたが、それでも一旦、視界から逸れてしまえば、当の一羽を二度と再び識別できなかったのだ。

ヤーコブがどこでどのようにして自分の仲間から、群れの無名の一羽である安全な状態から離れてしまったのか、私は決して知ることはあるまい。その輝かしくも、また同じくらいに悲劇的な、並はずれた宿命を自ら選びとつたのか、どうしようもなく引き受けたのかも。おそらくは後者の方だろう。多分怪我をしたのか、あるいはまだ飛べないうちに巣から落ちるかして、随分若い時に人に見つけられ、保護され、世話を受けて育てられたのかも知れない。だが、私たちの想像力は、現実においてそんなことがらでいつも満足するわけではなく、ともすれば、かけ離れたセンサーシヨナルな空想ももてあそびたがるのだ。だから私も、よくあるような先の可能性に加え、別にまだふたつ考え出した。このヤーコブは一種の天才であり、早くから通常レベルを超えた個体化と個別化を渴望していた。コクマル

ガラスの群れ一般の日常があまり知らぬ功業と成功と榮譽を夢みていた。そのあまり、彼はアウトサイダーの一匹狼となった。そしてシラーの歌う若者さながら、粗野な野育ちの同胞らのもとを去り、一人さまよい、ついに世界は何らかの偶然の幸運によって、若き天才たちすべてが昔から夢見つづけている、美と芸術と名声の王国へ至るあの扉を彼の前に開いた。このように考えられる、いや、想像はできる。

だが、私が考え出した別の話はこうだ。ヤーコブは、それはたしかに天才の資質と相容れぬというのでは決していないが、ワルだった、悪童であり悪さ坊主だった。父母、兄弟、親戚を、遂には群れ全体、あるいはそのまま行かなくとも共に棲息する集団全体を度外れた思い付きや悪戯で、まず呆れさせ時々は興がらせ、もう早くから抜け目ないすれつからして通り、次第に厚かましさを募らせた揚げ句、生家、近隣、群れとその上層部を憤慨させ、敵にまわしたため、敵かに追放の宣告とともに群れを追われ、贖罪の山羊さながらに荒野へ放逐された。しかし彼は、やつれ、死ぬ前に人間に出会った。そして、この不格好な巨大生物に対する生来の恐れを克服しつつ、彼らに接近し、仲間となり、その快活な性質と、とうに自覚していた特異性で彼らを魅了し、かくして都市と人間世界への道を、そして

おどけもの、俳優、名物、神童という、そこでの自分の地位を見出し出した。彼は今日ある彼となった。数多くの観衆の寵児、特に年配の紳士淑女をとりこにし、もてはやされる人気者、人間を友とすると同じく軽蔑するもの、独り芝居の芸人、無骨な巨漢には未知の別世界の使者、ある者から見れば道化者、別の者には不可解な警告者、哄笑と喝采を巻き起こし、愛され賛嘆され、同情され、ともかく万人にとつて一個の俳優であり、思索家にはひとつの問題であるもの。

しかし、我ら思索の徒は——つまり私以外にもそうした人は疑いなくまだたくさんいるのだから——我々の考えと憶測を、知りたい、空想をめぐらしたいという衝動を、単にヤー・コブの謎めいた出自と過去へ向けるだけではない。空想をかき立ててやまない彼という現象は、その将来をもう少しならぬ考察の対象とさせずにはいないのだ。そして、それを行う我らには、ためらいと、ある種、抵抗と悲しみの感情がつきまとう。我らが寵児ヤー・コブを迎えるとおぼしいその最期は、むごいものだろうから。例えば、彼の「飼い主」であるというエネット温泉のあの伝説の女性に看取られ、暖かな部屋で息を引き取るといふ自然な安らかな死を彼のために描きだそうと随分努力しても、推定できるあらゆる事象が反対するのである。野生と自由を棄て、

同族の集団の保護を離れ、人間世界へ、文明世界へ入り込んだ生き物は、たしかに異質の世界へ同化する才を有していよう。己れの唯一無比の情況の利点すべてを認識するほどに抜きん出ていよう。それでも、この情況には無数と言つてよいほどの危険が潜んでいる。当の生き物にしても、それを免れるのは容易ではあるまい。これら恐ろしい危険について想像しはじめればぞつとする。電流がある。猫か犬のいる小部屋に閉じ込められるかも知れぬ。残酷な子供に捕まり、いじめられるかも知れぬ。

年ごとに一人の王を民意や籤で選んだ古代民族に関する報告がある。そこでは、名もなく貧しい、見目麗しい若者（あるいは奴隷であつたかも知れない）が突如、美々しい装いに飾られ、王位に上げられた。宮殿が、あるいは、贅を凝らした王の幕屋が彼を迎えた。恭しくかかずく家来、美しい娘たち、美食、美酒、美しい馬、そして美しい音楽：王位と権力と富と絢爛さをめぐるすべてのおとぎ話が、この選ばれた者には現実となった。かくして、新たな支配者は壮麗な日々を、週を、月を送り、一年が過ぎた。すると彼は縛められ、刑場へ引かれ、屠られた。

何年も前に一度読み、その信憑性を検討する機会もなく、その気持ちにもならなかつたこの物語り、輝か

しくも残忍な、メルヒエンのように美しくも死に酔い痴れたこの物語りを私は幾度も思わずにはいられなかつた。一方、目の前のヤーコフは、女性の手のピーナッツをついばんだり、余りにのるまな子供をくちばしてつついてたじろがせたり、関心を見せながらも幾分大目に見るように私のオウム語に耳をすませたり、一方の足の爪でしっかりとおさえた紙の玉を感じし切っている観客大衆の前でついばみながら、その頑固そうな頭を動かし灰色の頭の毛を逆立て、憤激と楽しみを同時に表しているような様を見せているのだった。

あるマウルブロン神学校生

およそ一五〇年来、シユヴァーベンの少年たちが給費生として起居し、プロテスタントの神学者となるべく、ラテン語、ヘブライ語、古典ギリシア語や新約聖書のギリシア語を教えられているマウルブロン修道院では、これら少年たちの自習室に専ら古典古代を思わせる美しい名前がつけられている。例えばフォーラム、アテネ、スパルタといった類であり、そのひとつがヘラスだ。このヘラスの部屋には、壁二面に沿って小さな間隔を置きながら十二ほどの自習机が並び、そこで神学校生たちは宿題をすませたり作文を書いたり、ま

たそこに辞書や文法書や、更に、両親や姉妹の写真を置いていたりする。そして机の蓋の下には、ノートだけでなく、友人や親からの手紙や愛読書、集めた鉱石、母親が肌着を送ってくれるたびに一緒に小包に入れる食べ物（これが、ばさついたおやつに色を添えてくれるのである）、例えばジャムの小鉢、日持ちのきくソーセージ、ひとびんの蜂蜜、あるいは一塊の燻製がしまつてある。

部屋の長い方の壁の中央あたり、「ヘラス」の標（しるし）である古代ギリシア風の寓意的な理想的な女性像の絵を収めたガラスの額の下に、一九一〇年頃、アルフレートという名の少年が机についたり立ったりしていた。シユヴァルツヴァルト出身で教師の息子であり十五才の彼は、ひそかに詩を書き、また、その輝かばかりのドイツ語の作文で学校中に名が知られていた。彼の作文はよくクラスの補習教師が手本として読み上げたのである。その他の点でアルフレートは、多くの若い詩人同様、様々な奇癖、奇行のため、あるいは人目を惹き、あるいは嫌がられていた。朝、彼の共同寝室で起床するのは、大抵、彼が最後だった。彼の唯一のスポーツは読書だった。からかわれれば痛烈な嘲りを返したり、気分を害して口をつぐみ、自分の殻に閉じこもったりした。

彼が最も好み、ほとんど暗記していた本の一冊が『車輪の下』だった。厳禁されていたのではないが、学校の上層部はあまり評価していない小説だった。この書物の作者についてアルフレートは、その人も以前、二十年ほど前、マウルブロン神学校生であり、「ヘラス」の住人だったと知っていた。この作者の詩も彼は知っており、内心、その先例に倣って、俗物どもから白眼視される有名な作家、詩人になろうと企てていた。もともと『車輪の下』の当の作者は、以前、修道院と「ヘラス」にさほど長くいたわけではなかった。彼は飛び出してしまい、自らの意志を貫いて所謂「自由文筆業者」になるまで、何年も苦しい日々を忍ばねばならなかったのである。さて、気が弱かったのが、あるいは両親を慮っていたのが、ともかくアルフレートはこれまで、それを範に不確実な境遇へと飛び込んではいなかったし、神学校生の身分にとどまっており、また大学で神学を専攻するのは多分、確実なのだろうが、しかしいづれ、彼が世界に小説や詩を下賜し、今日彼をみくびっている連中に高貴な報復を遂げる日が訪れるのであつたらう。

さて、ある午後のこと、「沈黙作業」の時間に、家から送って来た蜂蜜の小瓶のほかに自作の詩や他の原稿をしまっている宝物庫の中の何かを捜そうと、彼は

机の蓋を大きく開け放っていた。

夢見心地のまま彼は、インクや鉛筆で書かれたり、小刀で彫られている、かつてこの机の世話になった人物の名前をひとつひとつ読み始めた。「H」で始まる名前ばかりだった。全自習室を通して生徒の座席はアルファベット順に定められており、中程の机は何十年の間、常に「H」で始まる名前の神学校生が使用してきたのである。その中には功績多いオットー・ハルトマンがいた。そして現在、修道院のギリシア語と歴史学の教授である、かのヴィルヘルム・ヘッカーの名もあつた。入り混じった昔の署名をぼんやり見つめてみると突如、彼は身を震わせた。そこに、なじみでもあれば大切に思つてもいるある名前が、自分の気に入りとして、また模範として選び出していたあの詩人の「H」で始まる名前が、明るい色の木の蓋にインクの不器用な筆跡で書かれていたのだ。つまりここで、まさに彼、アルフレートの机で、一風変わつていたあの人がかつて自分の好きな詩人の作品を読み、自分の抒情詩を習作していたのだ、あの人がこの棚に自分のラテン語やギリシア語の辞書、ホメーロスやリヴィウスを立てていた、ここに座り、未来の計画を様々に紡ぎ、ここからある日、例の散策へ飛び出したのだ（言い伝えでは、後日、土地の巡査に捕まつて連れ戻され

たとされている)。素晴らしいことではないだろうか？　そしてそれはまるで一種の予兆、一種の運命の合図のようではないか？　曰く、「おまえも詩人であり、特別な、実現困難な、しかし貴重な存在なのだ、おまえも使命を帯びているのだ、やがておまえも後に続く若者たちの星、彼らの模範となるのだ！」

自習時間の終わりをアルフレートは待ちきれない思ひだつた。鐘が鳴ると、静かだつた部屋はすぐに騒々しくなつた。大声、笑い声、机を閉める音。普段は何も一緒にすることのない隣席の生徒に少年はもどかしげに合図をした。そして彼がすぐには来なかつたので、いらいらして口に出した、「おい、来いよ、見せたいものがあるから」呼ばれた方は平然と近寄つて来た。アルフレートは、感激した様子で、自分が発見した署名を彼に見せた。二十年前ここに住まい、マウルブロン修道院では今も熱のこもつた議論的となり、全く独特の名声を享受しているあの男の名前である。

た。このあしらいに腹が立つた、自分に腹が立つた、自分の見つけた宝物を自分一人にしまつておけず、よりによつてこのテオドアなどに見せずにはいられなかつたなんて。誰にもわかるものが、生きている世界が違ふのだ、誰だつてひとりなのだ。この恨みと失望は彼の心をずっとさいなみつづけた。

マウルブロンでのアルフレートの行動や苦惱について、私たちはこれ以上何も知らない。彼の作文や詩も残されていない。だが、後の彼の人生の経過については、大まかにわかつている。彼は神学ゼミナールの両課程を修了したものの、テュービンゲン大学神学寮の入寮審査には合格しなかつた。熱意を抱かぬまま、母親の願いをおもんばかつて、彼は大学で神学を専攻し、第一次世界大戦では志願兵として出征し、曹長の身分で帰還したが、教会関連の職務には一度もつかなかつたらしく、ある種の商業活動に従事した。一九三三年、彼はあの大きな陶酔を共にしなかつた。ヒトラー一統に抵抗し拘束され、おそらくは屈辱的な扱いを受けたのだらう。釈放後、心神虚脱状態に陥り、すぐさま、ある精神病院に収容されたのだつた。親族がそこから受けとつた音信は全くなかつた。一九三九年の短い死亡通知のみである。かつての神学ゼミナール同窓生も、テュービンゲン大学学生組合の仲間も、最早、一人と

して彼とつながりを持っていなかった。しかしそれでも、彼が忘れられたのではない。

マウルブロン部屋の机を並べた、ほかならぬあのテオドアが、偶然、成功に恵まれなかった彼の人生とその惨めな破滅の悲しい物語を知った。そして、アルフレートが愛読し模範と仰いでいた詩人、『車輪の下』の作者がなお存命であり、連絡もとれるので、テオドアは止むに止まれぬ感情を抱いた。何か償いをするしなければならぬ、何らかの形でどこかに、この才能があつても不運に終つた人物の、そして、あの詩人への彼のいかにも若者らしい愛情の記憶は生きつづけねばなるまい。机に向かい、彼は、思いも及ばぬ遠い昔、アルフレートの先輩として「ヘラス」のあの机についていた、かのH・Hへ可哀想なマウルブロン級の友の物語を記して長い手紙を書いた。彼は成功した。老人は彼の物語に興味を抱いたのである。そして、神学校生アルフレートのことが、なおしばし生き続けるよう、この記録を書き留めた。なぜなら、保持と保管は、また無常と忘却への抵抗は、他の別の行動に劣らず、たしかに詩人の使命のひとつだからである。

訳者記…本稿の作成に際し、日本ヘルマン・ヘッセ研究会の山本洋一氏と高橋修氏に有益な指摘をいただいた。